

環日本海交流史研究集会記録

「玉をめぐる交流」

谷内尾 晋司（所長）

はじめに

石川県はもとより、日本海沿海域各県の埋蔵文化財調査機関では毎年新たな発見が相次いでおり、累積した膨大な調査成果をどのように研究し活用していくかが大きな共通的な課題となっております。このため、当センターでは「環日本海文化交流史研究事業」を企画し、基礎的な調査研究を進めるとともに、沿海域各地の研究者にご参集いただき、年1回「交流史研究集会」を開催しているところであります。

平成14年度は「玉をめぐる交流」をテーマに開催いたしました。

玉がもつ磨き抜かれた輝きや美しい色調は私たちを魅了し、古今東西を問わず人々の玉への憧憬は強いものがあります。また、古代にあっては、身体を美しく飾るアクセサリーとしての意味以上に、呪術的あるいは護符的な意義の強い装身具として用いられたと考えられております。

特に、緑色凝灰岩を素材とした「越（北陸）の玉づくり」は、弥生時代中期から古墳時代前期にかけて展開し、この期の集落遺跡を発掘すると、必ずと言っていいほど関係遺物が出土し、規模の大小はあれ、「冬場の手仕事」ともいえる家内的な生産活動が行われていた実態が窺えます。また一方、出雲や丹後では、近年、専門的ともいえる大規模な玉づくり遺跡が調査されており、北部九州でも緑色凝灰岩を素材とした管玉づくりが確認されております。このように日本海沿岸地域では、玉づくり関係資料が集積されつつあり、各地の製作や消費の実態などを比較検討することが可能となってきました。

このような状況を踏まえ、今回の研究集会では、列島の東北部を含めた日本海沿岸域の、玉の生産や消費、流通について焦点を当てました。北部九州地方については福岡県の岡寺 良氏、山陰地方については島根県の深田 浩氏、丹後地方については京都府の田代 宏氏、北陸地方については福井県の浅野良治氏、石川県の久田正弘氏、富山県の中野由紀子氏、新潟県の田海義正氏、東北地方については青森県の大野 亨氏、北海道地方については西方麻由氏にお願いし、各地域の実態や状況を、さらに韓国の玉づくり関連資料について庄田慎矢氏にご報告いただき、研究討議を行いました。

報告や討議の中で、集落や墳墓等での製品や関連資料の出土の在り方等から、生産や消費の主体者、流通機構の問題が大きな論点となりました。特に、弥生期における管玉生産が交易品（交換財）としての広域流通を目的としたものか、否か、列島各地で出土する緑色凝灰岩製管玉の技法的特色や石材の産地同定の問題も含め、これからの大きな課題であります。北陸における玉づくりの歴史的位置づけを考える上での研究の視点や方向性を明らかにすることができ、有意義な研究集会でありました。

当センターでは、今後とも、テーマを替え、継続して年1回の「交流史研究集会」を開催してまいりたいと考えております。この事業が日本海を媒介とした地域間交流史研究の進展に一定の役割を果たし、多少とも日本海沿岸地域の特性を把握し、本県が持つ歴史的意義の解明に寄与することが出来ればと思っております。さらに、この「交流史研究集会」が日本海沿岸地域の各調査機関等の研究交流の場となることを願っております。皆様のご協力をお願いいたします。



北部九州における玉製品の 生産と流通・受容について

岡寺 良（福岡県総務部国立博物館対策室）

北部九州では、他の日本海沿岸地域とは異なり、地域内において玉製品を生産していたというイメージは非常に薄い。しかし、弥生時代の北部九州の玉製品を概観すると、玉製品を主体的に受容、消費そして生産していたことがわかる。以下、北部九州の玉製品の受容、消費、生産の様相を提示する。弥生時代の前段階となる縄文時代晩期には、北部九州では、九州南部で製作されたと考えられる濃緑色の変成岩（蛇紋岩）製のエンタシス状の管玉と「コ」の字状の勾玉がセットとなって流入する。しかし、これらの玉製品は、弥生時代の開始に相前後して急速に衰退していき、弥生時代の玉製品へとつながることはなかった。

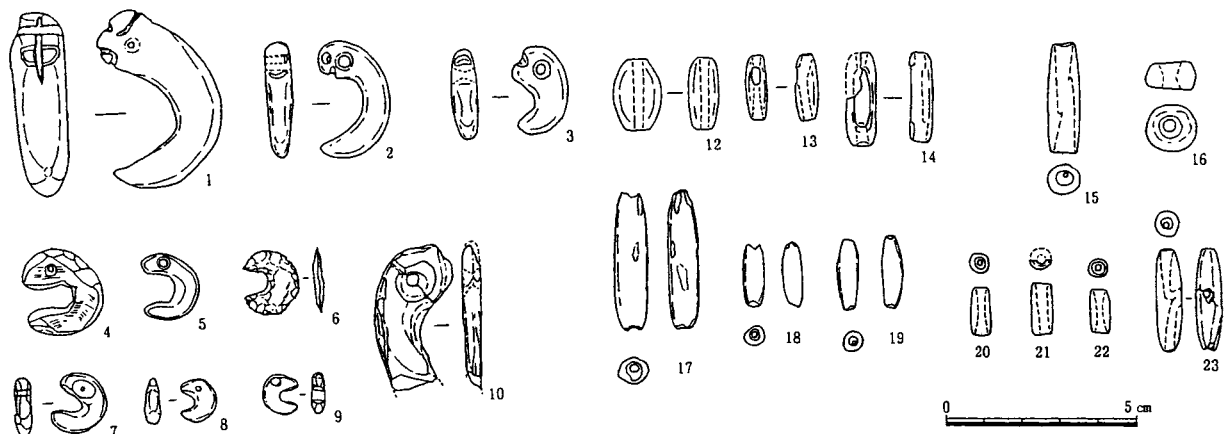
弥生時代に入ると、天河石（アマゾナイト）^{てんがせき}製の勾玉、硬質緑色凝灰岩製の管玉、翡翠製の勾玉などが認められるようになる。天河石製の勾玉は朝鮮半島製と考えられ、日本列島では北部九州にのみ分布し、数例を数えるに過ぎない。また、硬質緑色凝灰岩製の管玉は、時期の早いものでは早期の佐賀県菜畑遺跡出土品があげられ、弥生時代後期まで継続して確認できる。前期のものの多くは朝鮮半島製と想定され、理化学的分析の結果では、北部九州から中国・四国地方にかけての地域に分布している。翡翠製の勾玉は、朝鮮半島製の玉類とは異なり、北陸地方（姫川・青海川流域）産であるが、北部九州によく認められる緒締形・丁字頭形・櫛形の勾玉は、その分布から、北部九州内で生産されたと考えられる。これらの他にも、朝鮮半島製のガラス製品も流入するようになり、玉製品に非常にバリエーションが出てくるのもこの時期からである。

弥生時代後期には、それ以前の玉製品に加え、春日市須玖遺跡群を中心とした福岡平野から佐賀平野にかけての地域で、ガラス製の勾玉・丸玉が生産されるようになり、それとほぼ同じ地域で製品が出土している。須玖五反田遺跡では、弥生時代後期後半のガラス工房跡が検出されており、ガラス滓（鉛バリウムガラス）土製鑄型（勾玉・丸玉）^{るつぽ} 埴塼片が出土している。

また、甘木市平塚川添遺跡や福岡市西新町遺跡などの数例の遺跡では、緑色凝灰岩製の原石や管玉未製品などが出土してはいるが、単発で非常に小規模である。なお、西新町遺跡からは、古墳時代初頭を前後する時期の蛇紋岩製勾玉未成品や小玉鑄型も出土しており、特に小玉の土製鑄型は、朝鮮半島にしか出土例が見られない特徴をもつもので、朝鮮半島との交流を物語る資料だが、ガラス製勾玉や丸玉とは異なり、同時期の小玉のほとんどが鑄造製品でなく、朝鮮半島で他の技法で製作されたものであることから、ガラス小玉の鑄造は非常に小規模であったと考えられる。

そして、古墳時代初頭以降、北部九州を主体とした玉製品の生産及び流通は、衰退・消滅していき、この時期に、玉製品の流通体系の変化を求めることができよう。

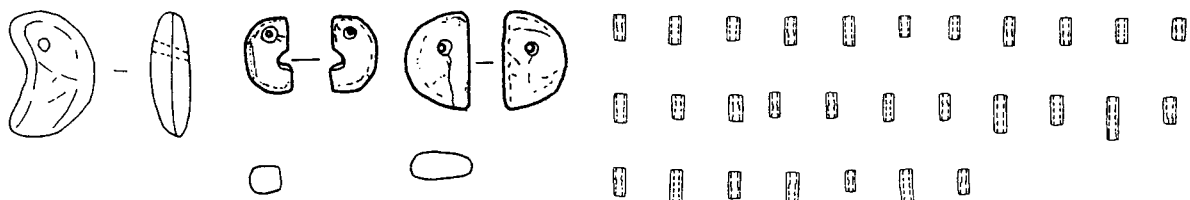
以上のように、北部九州の弥生時代には朝鮮半島からの一貫した玉製品の流入が認められ、北部九州を基点とした列島内での玉製品の流通圏も、かなり広域にわたっていたと想定できる。また、翡翠製・ガラス製勾玉に見るように、北部九州が独自に、かつ主体的に生産していた玉製品も少なくない。しかし、それらの勾玉や朝鮮半島から少量しか流入しなかった天河石製勾玉などは、他地域に流通することなく自己完結的な流通のあり方を示している。この点に北部九州の弥生時代社会の特色が表れているといえよう。



1・8・17～19 熊本県中堂 (1は土製), 2・3・12～14 熊本県ワクド
石, 4・5 大分県大石, 6・15・16 熊本県上南部, 7 福岡県高原, 9・10・
20～23 福岡県梅現塚北

九州縄文時代晩期の玉製品

(松本直子1998「玉類の分析からみた縄文時代後晩期九州における文化動態の一側面」『人類学研究』10)



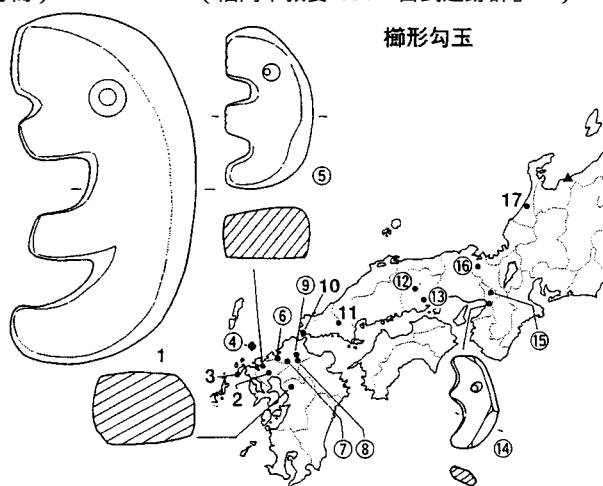
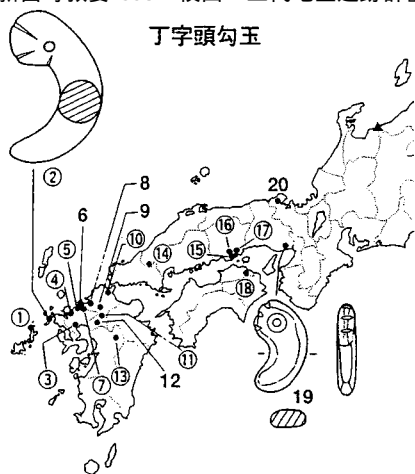
福岡県夜須町大木遺跡

福岡県新宮町三代貝塚

福岡市吉武高木遺跡

天河石 (アマゾナイト) 製勾玉 (夜須町教委1997『大木遺跡』新宮町教委1995『夜臼・三代地区遺跡群』第5分冊)

弥生時代前期の緑色凝灰岩製管玉 (福岡市教委1996『吉武遺跡群』Ⅷ)



(S = 1/2)

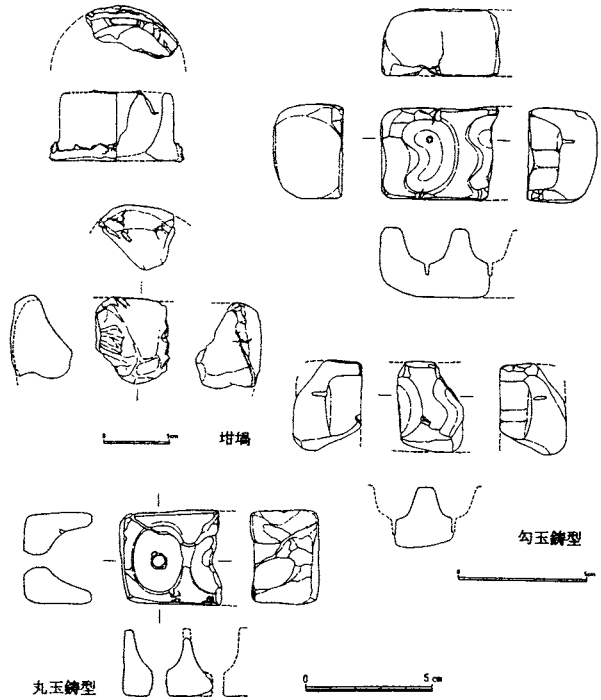
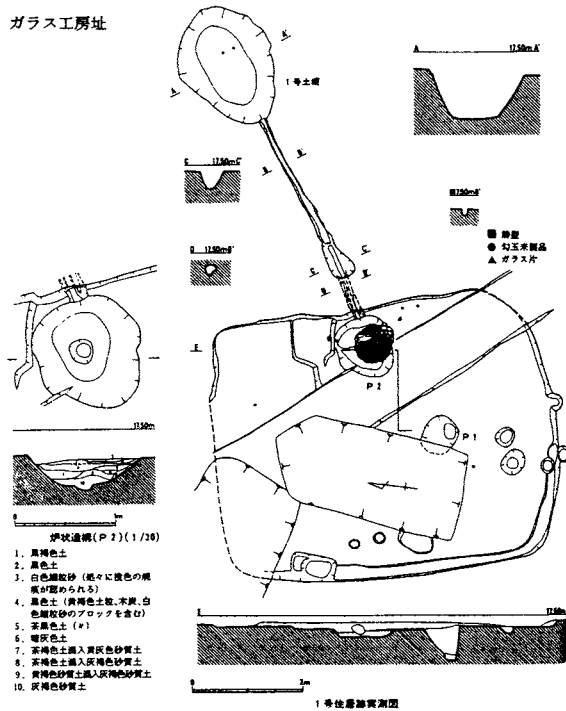
番号に○はヒスイ, ▲は糸魚川ヒスイ産地

- ①. 長崎県神ノ崎 ②. 長崎県根獅子 ③. 佐賀県
枕島山 ④. 佐賀県宇木汲田 (2点) ⑤. 福岡県石
ヶ崎小路 ⑥. 福岡県平原 (ガラス製3点) ⑦. 三
雲南小路 (ほかにガラス製1点) ⑧. 福岡県須玖岡
本 (ガラス製) ⑨. 福岡県豆田 ⑩. 福岡県岡
⑪. 福岡県平塚垣添 ⑫. 福岡県祇園山 ⑬. 熊本
県下山西 ⑭. 島根県前立山 ⑮. 岡山県橋築
⑯. 岡山県鑄物師谷 ⑰. 岡山県雲山鳥打 ⑱. 香
川県大井 ⑲. 兵庫県田能 ⑳. 京都府奈具岡

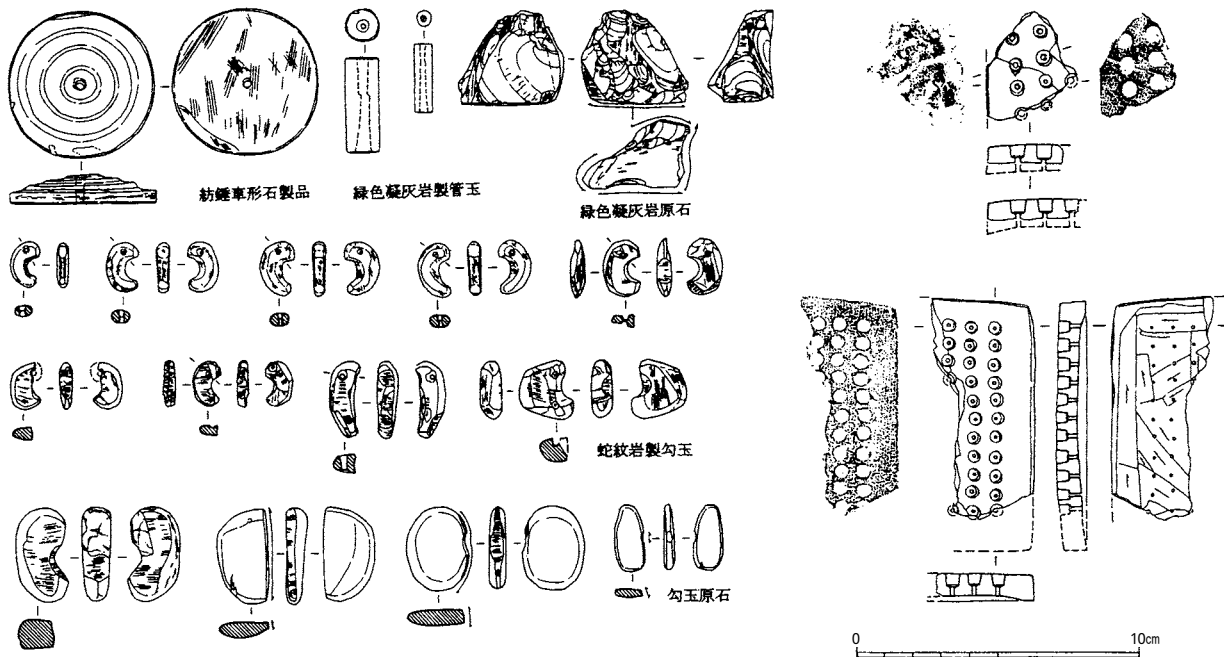
1. 熊本県鹿央町出土 2. 佐賀県牟田辺 3. 長
崎県津吉 ④. 長崎県原ノ辻 ⑤. 佐賀県宇木汲田
⑥. 福岡県吉武高木 ⑦. 福岡県津古内畑 ⑧. 福
岡県アナフ (2点) ⑨. 福岡県鎌田原 ⑩. 山口県
綾羅木郷 ⑪. 山口県惣ノ尻 ⑫. 岡山県宮の前
⑬. 岡山県矢藤治山 ⑭. 大阪府鬼虎川 ⑮. 大阪
府高宮八丁 ⑯. 京都府青野西 ⑰. 石川県寺中

翡翠製勾玉 (丁字頭形・櫛形) の分布 (河村好光2000「ヒスイ勾玉の誕生」『考古学研究』47 - 3)

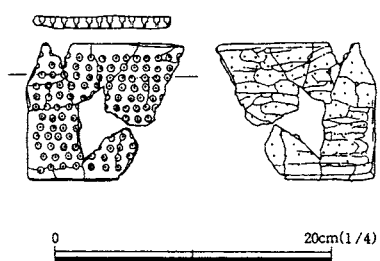
ガラス工房址



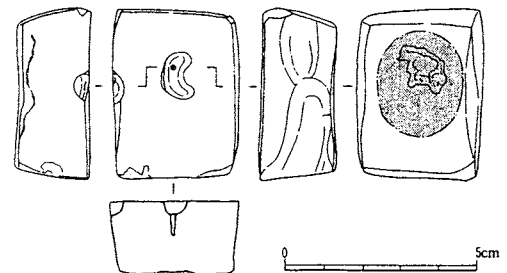
春日市須玖五反田遺跡 (春日市教委1994・1995「須玖五反田遺跡」1・2)



西新町遺跡出土玉生産関連遺物 (福岡県教委2000『西新町遺跡』Ⅱ)



京畿道漢沙里遺跡出土ガラス玉鏝型
(漢沙里先史遺跡発掘調査団1994『漢沙里』5)



西新町遺跡ガラス玉鏝型
(福岡県教委2000『西新町遺跡』Ⅱ)



山陰地方における玉生産 - 出雲地方を中心に -

深田 浩（島根県教育庁古代文化センター）

1. 出雲における玉作遺跡の分布状況

出雲における玉作遺跡は山間部を除く出雲地域のほぼ全域に分布しており、現在のところ約100遺跡が知られている。これらの多くは表採品によるもので詳細不明な遺跡も多いが、弥生時代から平安時代にかけて各時代の玉作遺跡が明らかとなっている。現在でも「めのう細工」が行われている玉湯町には、玉の原材料である良質な碧玉や瑪瑙を産出する花仙山（標高199m）が存在し、出雲の玉作遺跡の大半は花仙山周辺に集中する。その数は50遺跡以上にもなるが、古墳時代中期には花仙山から遠く離れた大原遺跡（安来市）でも碧玉・瑪瑙を使用した大規模な玉生産が行われており、各時期毎に出雲における玉作遺跡の分布状況が異なっていたことを窺うことができる。

2. 出雲の玉作の変遷 - 開始・変容・拡大・集約 -

出雲における玉作の開始は弥生時代前期まで遡ることができ、前期の松江市西川津遺跡では緑色凝灰岩を使用した擦切り技法による管玉生産が行われている。中期には松江市布田遺跡でも同石材・同技法による玉生産が確認されており、弥生前半期の玉作は碧玉を用いず、緑色凝灰岩製の管玉のみを生産していたことが窺える。後期になると石材や製品組成に変化がみられ、後期後葉の松江市平所遺跡では水晶製の丸玉・算盤玉、終末期の玉湯町史跡・出雲玉作遺跡宮ノ上地区では碧玉製勾玉の製作が開始され、碧玉製管玉は打撃分割法で製作されている。この技法や石材の変化には鉄器の普及が大きく関連しているものと考えられ、以後古墳時代に受け継がれていく。古墳時代に入ると碧玉・水晶に瑪瑙が加わり、以後碧玉・水晶・瑪瑙製勾玉（いずれも片面穿孔）、碧玉製管玉、水晶製品は古墳期を通じて出雲の玉作遺跡で普遍的に見られるようになる。また他地域では石製品が生産されるが、出雲では今のところ松江市後原遺跡で表採品が1点知られているのみである。中期になるとさらに滑石が加わるが、他地域のような模造品製作は確認されていない。また中期には玉作遺跡の数が急激に増加する。分布も出雲全域に拡大し、地域ごとに使用石材や製作技術が異なる等の地域差も認められるようになる。さらに中期後葉には碧玉製管玉の製作に片面穿孔が採用され始める。後期になると他地域の玉作は衰退し、出雲でも遺跡の分布範囲が再び花仙山周辺に集約されるが、遺跡内において複数の工房が営まれるようになり、出雲における玉生産の最盛期とみることができる。また、平玉生産が開始される一方、終末期にかけて滑石製品の生産は衰退する。奈良時代以降は碧玉製・水晶製の平玉生産が本格化し、古墳期を通じて生産され続けた碧玉製勾玉・管玉、瑪瑙製勾玉生産は衰退していく。

以上のように、出雲では弥生時代から平安時代まで一貫して玉作が行われており、他地域からみれば特異な玉生産地域であるといえる。特に古墳時代には石材・器種等において他地域と類似点がほとんど認められず、他地域から石材を搬入しての玉作も行われていない。従って、出雲の玉作における玉の組成や製作技術を今後より一層詳細に検討していくことで、全国の古墳出土玉類から出雲産のものを特定することが可能であろう。ひいては玉類の供給先や流通ルートの解明に繋がり、古代における社会構造の一端に迫ることが期待されるといえる。

【参考文献】米田克彦 1998「出雲における古墳時代の玉生産」『島根考古学会誌』15島根考古学会

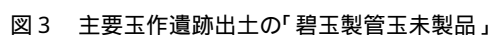
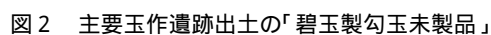
表1 出雲玉作の時代区分

- | | | | | |
|------------|------------|-------------|----------------|--------------|
| 1. 平ノ口通跡 | 16. 平所通跡 | 31. 玉神谷通跡 | 46. 平塚通跡 | 61. 火尻原通跡 |
| 2. 高広通跡 | 17. 大車玉作通跡 | 32. 一丁田通跡 | 47. 渡上通跡 | 62. 大田通跡 |
| 3. 岩屋口北通跡 | 18. 西川津通跡 | 33. 中島通跡 | 48. 小丸山通跡 | 63. 田仏通跡 |
| 4. 大原通跡 | 19. 大日通跡 | 34. 後原通跡 | 49. 蛇走通跡 | 64. 又下通跡 |
| 5. 玉造通跡 | 20. 柳富工通跡 | 35. 布田通跡 | 50. 鯉走通跡 | 65. 大東高校校庭通跡 |
| 6. 宮内通跡 | 21. 大角山通跡 | 36. 岩屋口通跡 | 51. 大車輪玉作寄町地区 | 66. 角田通跡 |
| 7. 鶴岡通跡 | 22. 乃白権現通跡 | 37. 永丁大通跡 | 52. 向新宮通跡 | 67. 大倉戸通跡 |
| 8. 竹ノ峰通跡 | 23. 平松通跡 | 38. 布志名狐塚通跡 | 53. 上野原3丁目/上郷 | 68. 滝代通跡 |
| 9. 駒込通跡 | 24. 小城口通跡 | 39. 向市通跡 | 54. 延木谷通跡 | 69. 矢野通跡 |
| 10. 駒乙通跡 | 25. 堀ノ尻通跡 | 40. 六反田通跡 | 55. 富原通跡 | 70. 古志本通跡 |
| 11. 鶴見通跡 | 26. 田本通跡 | 41. 臨田通跡 | 56. 丸瀬野3丁目/市地区 | 71. 田畑通跡 |
| 12. 西ノ国Ⅱ通跡 | 27. 一崎通跡 | 42. 堂塚通跡 | 57. 有ノ木通跡 | |
| 13. 原ノ原通跡 | 28. 砂子原通跡 | 43. 宮畑通跡 | 58. ソリ田通跡 | |
| 14. 洗山池通跡 | 29. 片田通跡 | 44. 岩屋通跡 | 59. 神田通跡 | |
| 15. 布田通跡 | 30. 常盤通跡 | 45. 日鏡通跡 | 60. 西谷通跡 | |

図1 出雲玉作関連遺跡の分布（米田1998）

表2 主要玉作遺跡における使用石材

表3 主要玉作遺跡における玉の組成

表4 出雲における玉の消長（米田1998）表5 出雲における玉作遺跡の消長（米田1998）



京都北部（丹後地域）の 弥生時代石製玉類の生産について

田代 弘（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）

1. はじめに 京都府弥栄町奈具岡遺跡では、弥生時代中期に、鉄製工具類を用いた先進的な石製玉類生産（玉作り）が大規模に行われていたことが判明した。この発見で、丹後地域の弥生時代玉作りの実態が初めて明らかとなった（田代ほか1993・河野ほか1997）。同時に、弥生時代玉作りと鉄製工具に関する議論を大きく進展させる役割を果たした（野島・河野2001）。以上の成果を中心として、丹後地域弥生時代の玉作りを概観する。

2. 丹後の弥生時代玉作り遺跡 丹後地域において、弥生時代玉作りに関連する遺物・遺構が確認されている遺跡は12遺跡である。工房と推測される遺構に伴って未製品類、工具類などが一括出土して確認され、製作された玉の種類・製作工程等を知りうる事例は、弥栄町奈具岡遺跡の1遺跡のみである。これに準ずる事例として加悦町日吉ヶ丘遺跡、志高遺跡や、桑飼上遺跡がある。大半の遺跡では、関連遺物が散発的に検出されているのみである。

3. 玉作りの開始と展開

開始 前期に遡る可能性がある（途中ヶ丘遺跡）。中期初頭には確実に始まる（扇谷遺跡）。

展開 中期中頃～後半にかけて遺跡数が増加する。（峰山町途中ヶ丘遺跡、野田川町寺岡遺跡、加悦町須代遺跡・日吉ヶ丘遺跡、舞鶴市志高遺跡・桑飼上遺跡）。

中期中頃に、弥栄町奈具岡遺跡が形成され始める。この遺跡では中期後半にかけて100基に及ぶ玉作り関連遺構が営まれる。中期中頃に、緑色凝灰岩ないし碧玉製管玉を素材とする生産を開始する（東地区）。中期後半にかけて鉄製工具類を伴う水晶製玉類生産へと移行し、遺跡の規模が極大化する（西地区）。玉類とともに工具類も数多く出土しており、弥生時代石製玉類生産の全体像を理解する上で重要な資料群といえる。

衰微 後期にはいと、生産は小規模化し、衰微する。宮村遺跡・谷内遺跡・古殿遺跡で1、2点の緑色凝灰岩ないし碧玉製未製品の出土をみるのみとなる。この時期以降、緑色凝灰岩ないし碧玉製管玉は、北陸製など、他地域で作られた製品が主体となるようである。

4. 玉類の副葬と流通 墳墓への玉類の副葬は、中期段階では碧玉ないし緑色凝灰岩製管玉が主体をなす（志高遺跡・日吉ヶ丘遺跡）。後期には、これに加えて、舶載原料を用いて作られたガラス玉類が顕著となる。カリガラス製の小玉と鉛ガラス製の勾玉である。ガラス製玉類は1万3千点を超え、対馬と双壁をなす出土量といわれる（大阪府弥生文化博物館2002）。このように、後期には玉類副葬の主体はガラス製品へと移行する。多数の鉄器類とともに、丹後の弥生墓制を特徴づけることとなる。

参考文献

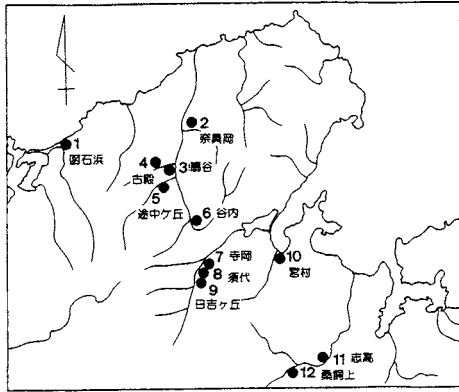
田代 弘ほか「奈具岡遺跡第4次」『京都府遺跡調査概報』第55冊（財）京都府埋文センター 1993

河野一隆ほか「奈具岡遺跡第6・7次」『京都府遺跡調査概報』第76冊（財）京都府埋文センター 1997

河野一隆『玉作りと鉄器文化』『第4回鉄器文化研究会 東日本における鉄器文化の受容と展開』鉄器文化研究会1997

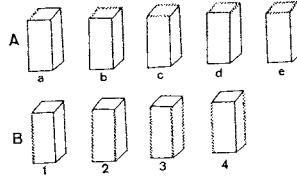
野島永・河野一隆「玉と鉄 - 弥生時代玉作り技術と交易 - 」（『古代文化』第53巻第4号 通巻第507号）（財）古代学協会 2001

『青いガラスの燦き 丹後王国が見えてきた』大阪府弥生文化博物館図録24 大阪府弥生文化博物館2002



- 1: 時期不詳 2: III~IV 3: II 4: V末か
 5: III~IV (前期に遡る可能性あり) 6: V末か
 7: III~IV 8: III~IV 9: III~IV 10: V末か
 11: III~IV 12: III~IV

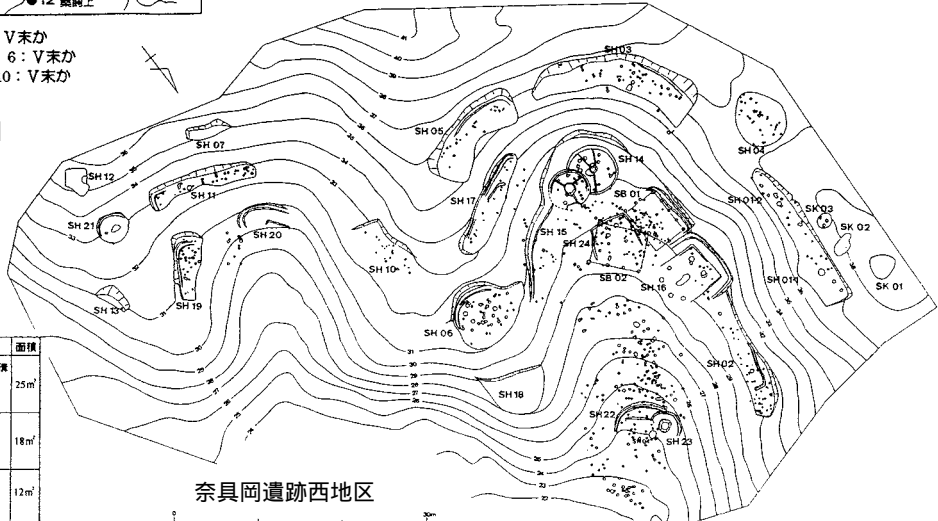
丹後地域玉作り遺跡分布図



角柱体施溝部位模式図
 破線は、掘切部位
 『下谷地遺跡』による。

S H23出土石針角柱体及び碧玉・
 緑色凝灰岩擦切施溝部位別計測表

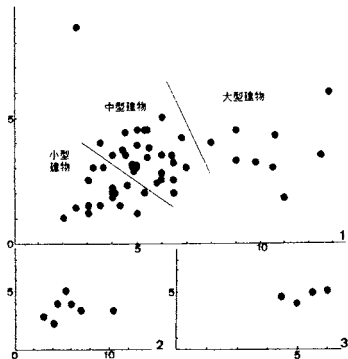
		安山岩	瑪瑙	碧玉 緑色凝灰岩
A	a	82	42	0
	b	29	36	0
	c	47	15	0
	d	26	39	0
	e	8	20	0
B	1	2	0	101
	2	4	0	51
	3	1	0	14
	4	0	0	9
総 数		199	152	175



奈具岡遺跡西地区

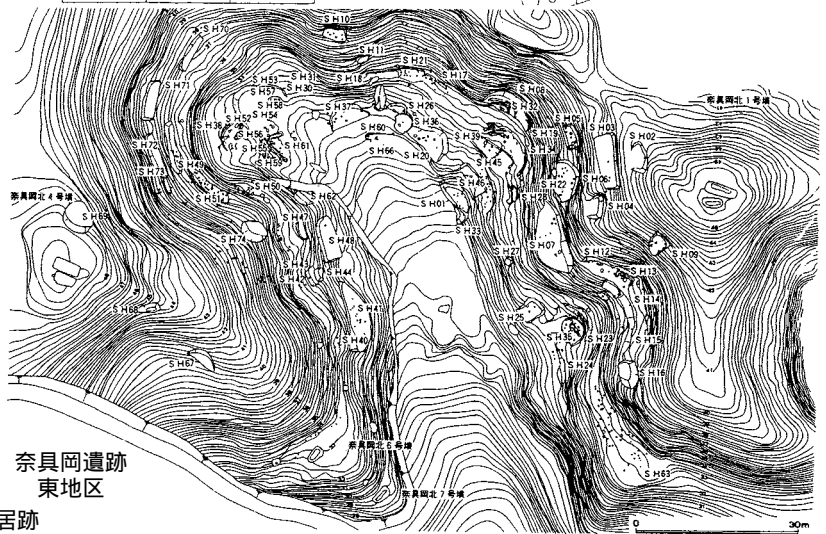
形態	名称	住居の構造と事例	面積
	円形	円形プラン・床面に防滴用の放射状溝 SH01・23・28・33・35・37	25m ²
	方形	方形プラン・周壁溝あり SH25・45・49・51	18m ²
	小型 方形	小型方形で主柱穴が不明確 SH02・04・05・06・11・25	12m ²
	テラス 状	テラス状・周壁溝あり SH02・22・24・26・27・29・32 36・39・40・46・48・50・74	19m ²

奈具岡遺跡住居跡・平面形分類



奈具岡遺跡建物規模

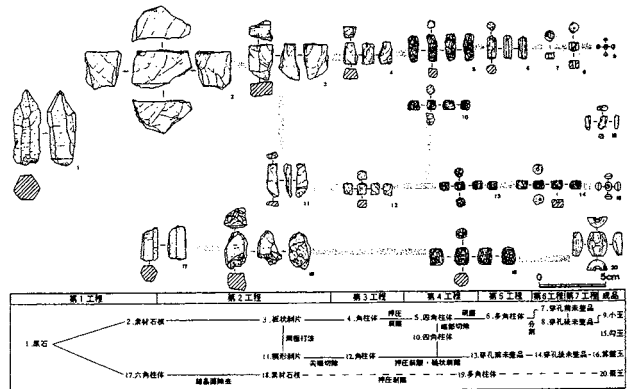
- 1: 住居跡全体 2: 円形住居跡 3: 方形住居跡



奈具岡遺跡
 東地区

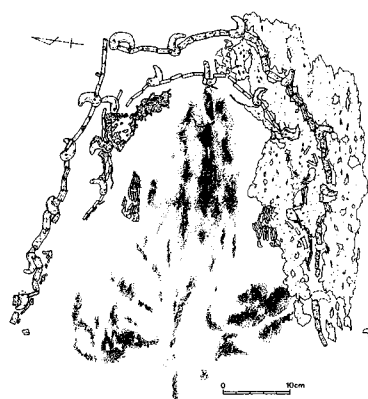
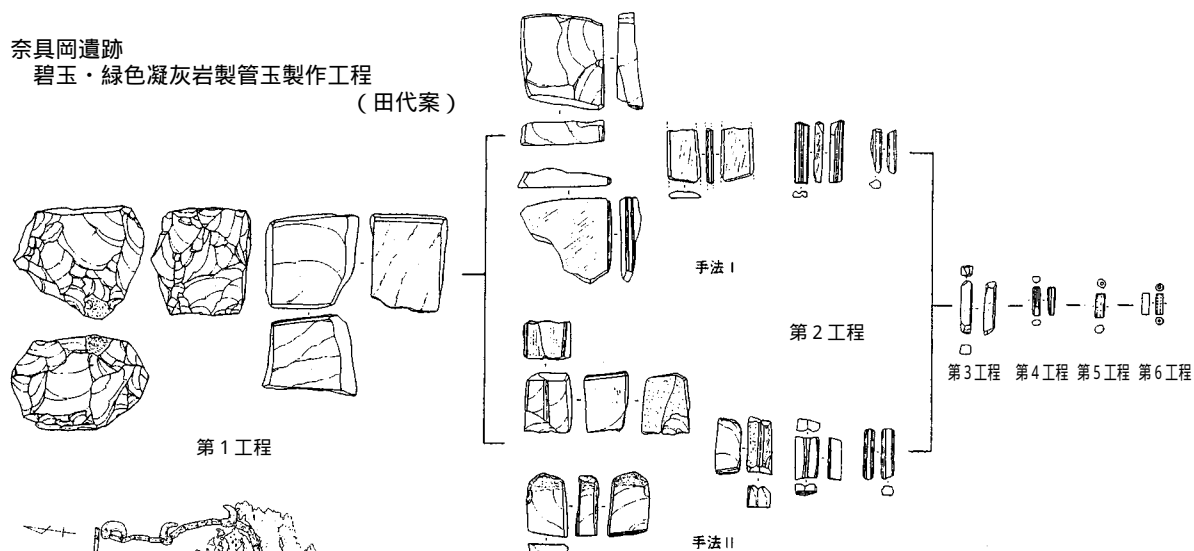
住居	層位	総量	住居	層位	総量	住居	層位	総量	住居	層位	総量	
S H01	全体	11125g	S H11	埋土	90g	S H27	床面	160g	S H48	全体	123g	
	1層	250g		S H12	全体		60g	S H28		埋土	220g	S H50
	2層	60g		S H13-14	表層	5g	S H29	埋土	38g	S H53	全体	830g
	3層	280g		S H17	全体	65g	S H30	流土	40g	S H54	全体	110g
	4層	850g		S H18	埋土	270g	S H32	全体	680g	S H55	全体	81g
	5層	470g		S H19	壁溝	50g	S H33	全体	575g	S H56	埋土	414g
	6層	1g		S H20	全体	7098g	S H34	全体	9040g	S H57	埋土	637g
	7層	1g			炉 1	2g		炉部分	180g	S H59	埋土	60g
	床面積室中	1290g			炉 2	2g			床面	15g	S H60	埋土
	流土	2166g		壁溝	130g	S H37	流土	790g	S H61	全体	265g	
表層その他	5727g	焼土付近	80g	S H38	埋土	920g	焼土	120g				
S H05	床面	30g	S H23	流土	54g	S H39	全体	3103g	焼土上面	20g		
	埋土下層	295g		S H24	流土		65g	焼土坑	40g	埋土	110g	
S H06	全体	110g	S H25	床面	20g	S H40	全体	60g	S H64	全体	150g	
S H08	床面	705g	S H26	全体	708g	S H41	全体	290g	S H66	床面	180g	
S H09	流土中	40g	S H26	床面	315g	S H45	全体	50g				

水晶製遺物出土一覧



水晶玉作り工程 (河野案)

奈具岡遺跡
碧玉・綠色凝灰岩製管玉製作工程
(田代案)



赤坂今井墳丘
墓第4主体部
出土玉類
管玉はガラス

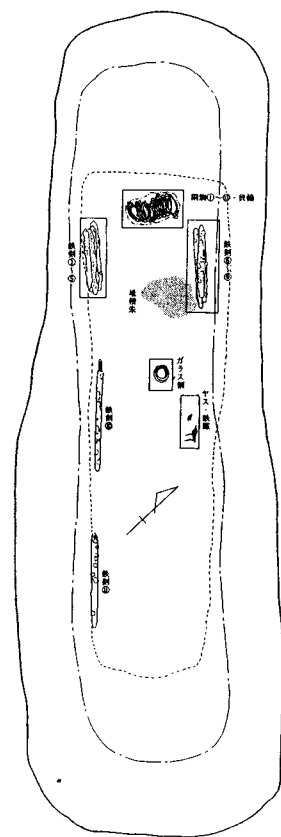
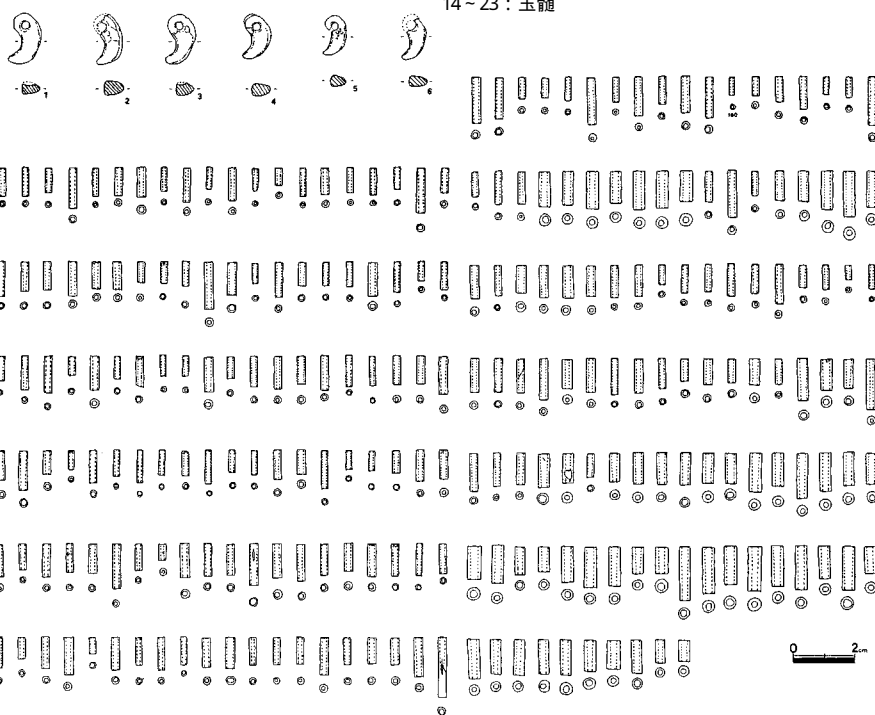


同上頭飾り復元図
(荻崎一哉案)



奈具岡遺跡石針関連資料(田代案)

1~13: 安山岩
14~23: 玉髓



大風呂南1号墳
第1主体遺物出土状況

第1主体出土玉類(管玉は綠色凝灰岩)



玉類生産と流通の問題点 —福井県出土資料を題材として—

浅野 良治（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター）

今回の報告では、県内の玉類生産遺跡（玉作遺跡）と消費遺跡（墳墓）の様相を併せて提示することにより、玉類生産の契機と製品の流通について述べた。対象とした時代は弥生時代である。

生産遺跡の様相

県内では弥生時代中期初頭より古墳時代前期にかけて玉作遺跡が存在する。弥生時代中期後半から後期前半に属する玉作遺跡は確認出来ていないが、この時期は遺跡が希薄な時期であり、玉作が行われていたかどうかは、今後の発掘調査によって明らかになるであろう。

長期にわたって生産を継続した遺跡は皆無で、規模の多寡にかかわらず、一時期に集中して生産を行った可能性が高い。また、比較的大規模な生産を行った玉作遺跡では、未成品の他、製品も大量に出土する。なお、残された製品に法量の規格性は認められない。

消費遺跡の様相

県内では、玉類を大量に持つ墳墓が数例確認されている。碧玉製管玉の出土総数は1000本に迫る数である。また、遺跡ごとに長さ・直径がある程度揃っており、法量に規格性を持つと言えよう。

肉眼観察によると、これらの管玉は、県内の玉作遺跡から持ち込まれた可能性が高いものがある。それが福井市原目山1号墓で出土した323本の管玉で、近在の玉作遺跡・林・藤島遺跡の資料と酷似している。

まとめ

墳墓出土管玉は法量・質感が揃っている。一つの生産地から選択して持ち込んでいると考える。

また、管玉は1本1本で「製品」となるのではなく、連にした時点で初めて「製品」となった可能性が高い。

生産遺跡における存続期間の短さと、出土遺物の中に大量の製品が存在することから、恒常的な交換を第一目的とするものではなかったと考えたい。では、玉類を生産した第一目的は何だったのか。それは、集落リーダーの要求・要請によって生産されたという仮説を提示したい。

県内の消費遺跡より出土した管玉は、法量に規格性を持ち、1墳墓に大量に持つ例が多い。被葬者の要求を満たした時点で生産は停止し、その結果生産遺跡には未成品に混じって、選ばれなかった製品が出土するのだと考えたい。

集落リーダーが玉をどのように使ったか。現時点では、他地域への贈答品・交換材としての使用数以上に、相当数が自分や近親者の身を飾るために使われたであろう、と言う他ない。いずれにせよ他地域へ流通する前に生産された玉類が一度リーダーの手に渡ったことが重要であり、玉の流通はリーダーの手を介して行われたのであろう。

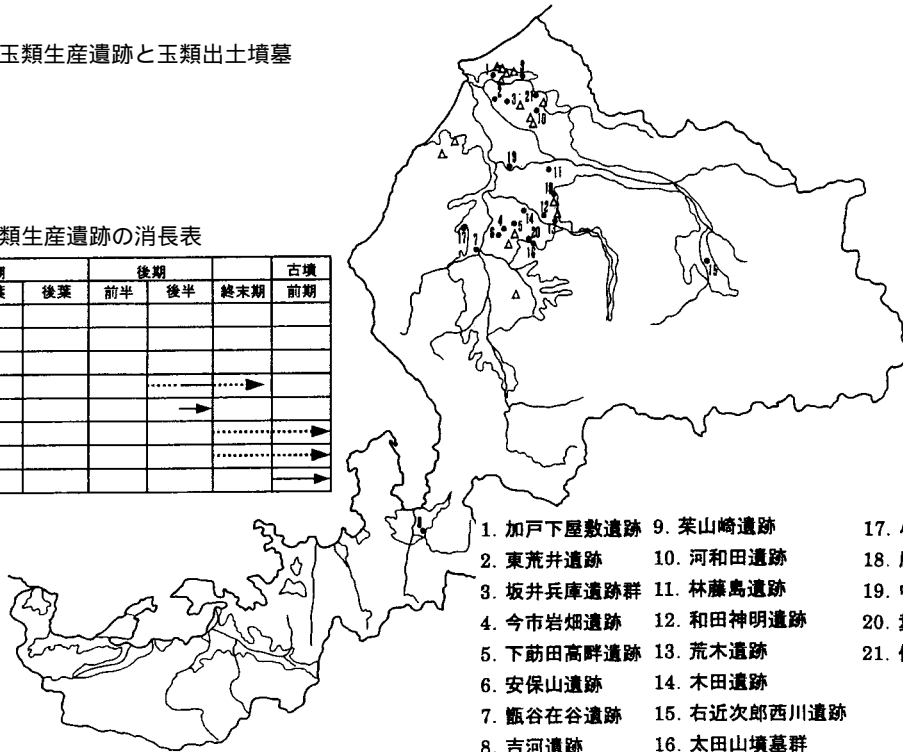
おわりに

この会の準備期間は、私にとって、とても楽しい時間でした。このような機会を与えてくださった石川県埋蔵文化財センターの皆様へ感謝致します。また、富山正明氏・宮田明氏からは、沢山の助言を頂きました。誠にありがとうございました。

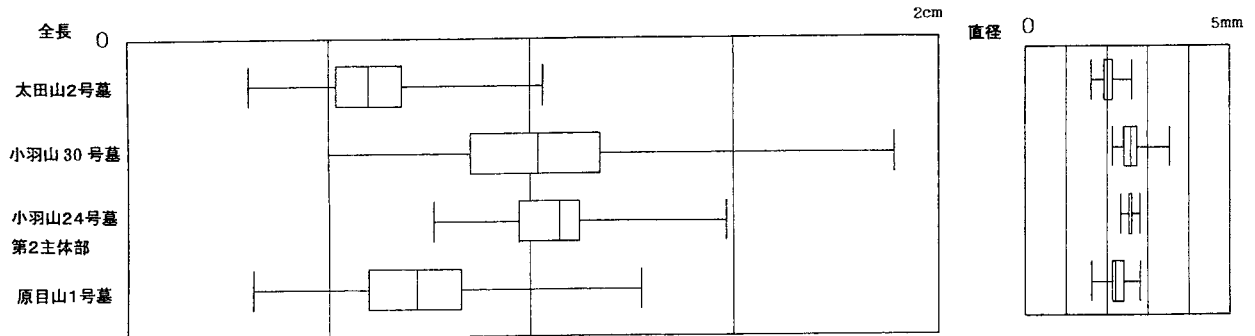
福井県の玉類生産遺跡と玉類出土墳墓

主な玉類生産遺跡の消長表

遺跡名	中期			後期			古墳 前期
	前葉	中葉	後葉	前半	後半	終末期	
瓶谷	→						
今市岩畑	→						
下屋敷	→						
林藤島				→			
右近次郎					→		
中角	→					→	
伊井						→	
河和田						→	



1. 加戸下屋敷遺跡
2. 東荒井遺跡
3. 坂井兵庫遺跡群
4. 今市岩畑遺跡
5. 下筋田高畔遺跡
6. 安保山遺跡
7. 瓶谷在谷遺跡
8. 吉河遺跡
9. 茶山崎遺跡
10. 河和田遺跡
11. 林藤島遺跡
12. 和田神明遺跡
13. 荒木遺跡
14. 木田遺跡
15. 右近次郎西川遺跡
16. 太田山墳墓群
17. 小羽山墳墓群
18. 原目山墳墓群
19. 中角遺跡
20. 糞置遺跡
21. 伊井遺跡



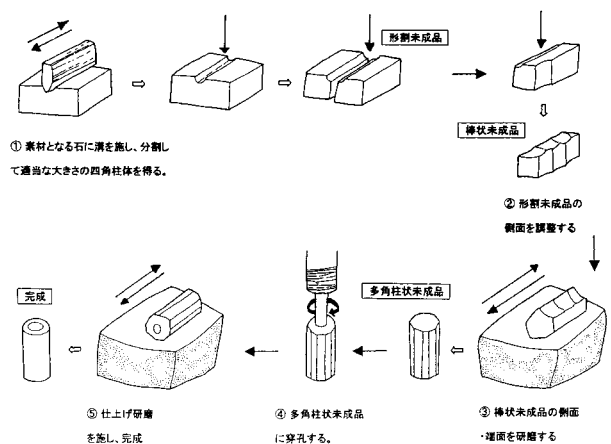
墳墓出土管玉法量ヒストグラム



清水町瓶谷在田遺跡



福井市今市岩畑遺跡



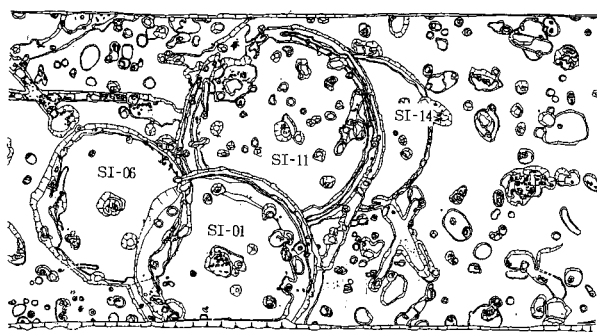
北陸の管玉模式図



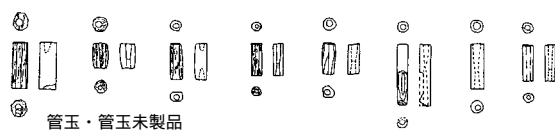


管玉未製品実測図

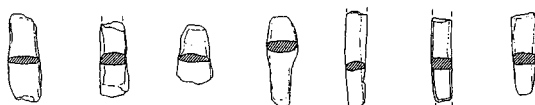
三国町下屋敷遺跡



工房平面図



管玉・管玉未製品



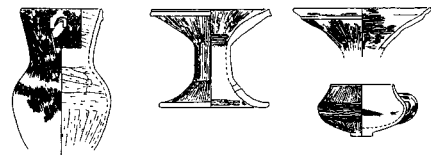
鉄製工具（上段鑿、中段調整工具、下段穿工具）



SI-11

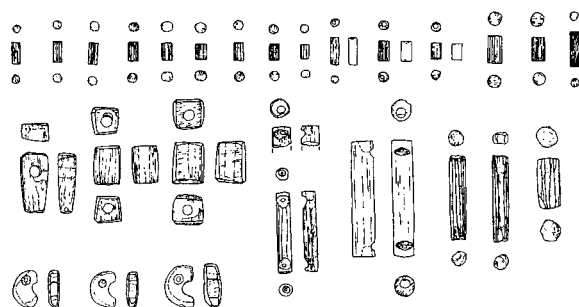
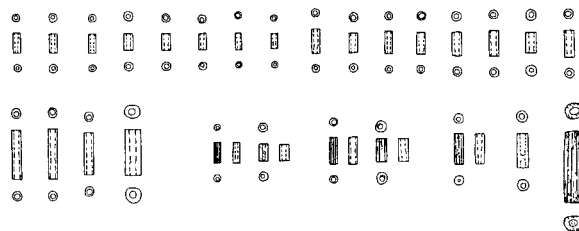


SI-01

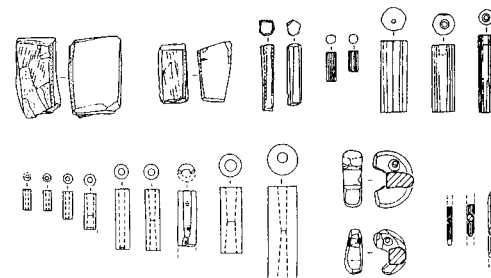


S = 1 / 12

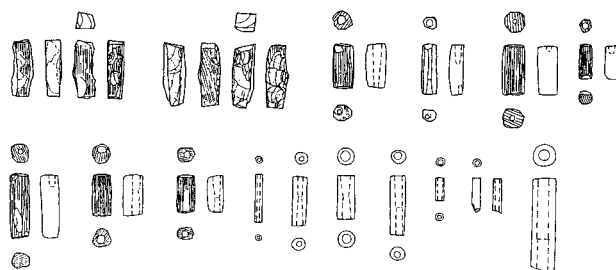
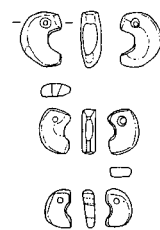
福井市林・藤島遺跡



管玉製品・穿孔工程未製品実測図



敦賀市吉河遺跡



福井市中角遺跡



石川県における玉の生産と交流 - 弥生時代を中心に -

久田 正弘（調査第2課）

1. 県内の玉の生産

石川県の弥生時代中・後期の遺跡では、玉生産遺物の出土が一般的であるが、遺跡間や同じ遺跡内でも場所によっては出土量の差が確認される。県内では大きく数箇所の集中区が確認される。南加賀地方では加賀市猫橋遺跡周辺（A地区）と小松市八日市地方遺跡～^{かけはしがわ}梯川流域（B地区）、北加賀地方では松任市内沿岸部（C地区）と金沢市内沿岸部（D地区）、能登地方では羽咋市周辺（E地区）と七尾市周辺（F地区）と富来町周辺（G地区）に集中する。

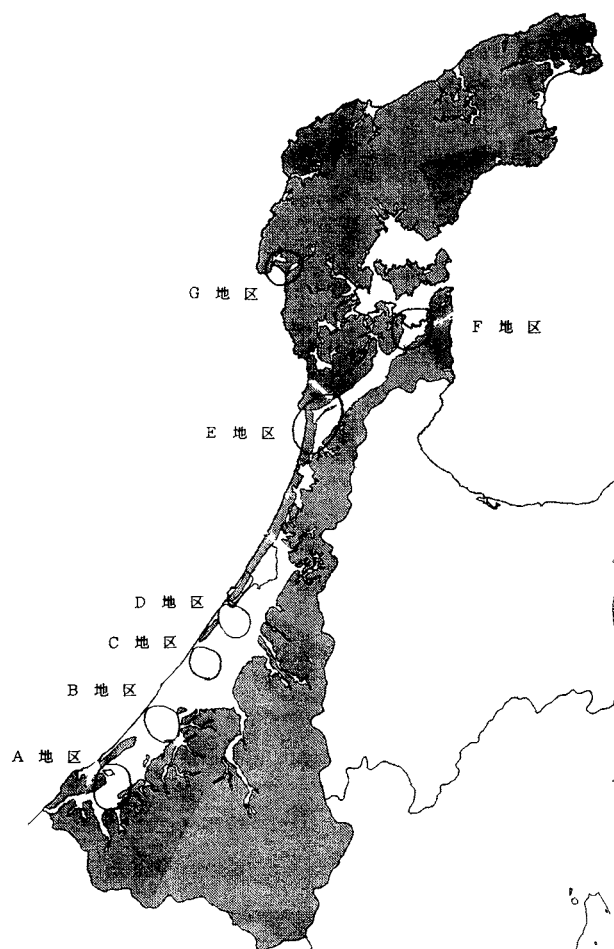
弥生時代 期にB地区八日市地方遺跡とD地区矢木ジワリ遺跡で開始され、期前半になると八日市地方遺跡の生産規模は大きくなり、A地区猫橋遺跡やC地区野本遺跡でも生産が開始される。期（専光寺・戸水B式）では遺跡の数が少ないので不明である。中期は施溝分割技法で行われ、後期には施溝分割技法は行われなくなり、鉄器による打割技法に変化する。期前半のC地区八田小鮎遺跡では輝石安山岩製の石針未製品があるが、乾遺跡（期後半）には鉄製錐が存在する。期前半のB地区一針B遺跡竪穴住居から椀形滓と青銅器鑄造鑄型が出土しており、玉素材の打割痕跡でも鉄器の使用が確認される。またE地区東の場タケノハナ遺跡では、施溝分割技法の角柱体に鉄器による打割痕跡が見られる例があり、その所属時期が問題である。

緑色凝灰岩は、管玉が基本であるが、野本遺跡などでは角玉も若干みられる。後期になると一針B遺跡や塚崎遺跡では管玉の超大型品があり、管玉以外の可能性が指摘されている。古墳時代前期では多くの地区で腕飾類を生産している。管玉は緑色凝灰岩製が殆どであるが、能登地方E～G地区では鉄石英製管玉の生産が若干認められ、山王丸山遺跡や細口源田山遺跡では墳墓から出土している。加賀地方のA・C地区でも微量生産が確認される。

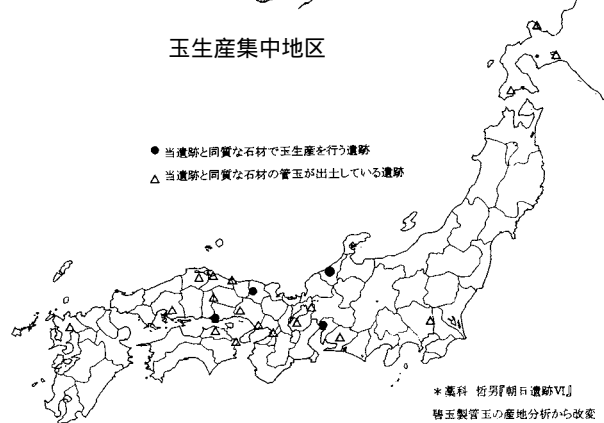
2. 地域間交流について

石川県内の管玉生産は、地区内や県内での消費を目的にしたものではなく、県外に出すことが主体であったと思われる。それは石川県内の遺跡では、各方面から搬入ないし模倣された土器が多く確認されることから想定される。外来系土器は東北南部系、信州系、東海系、近江系、近畿系、西日本系などが確認され、小松市八日市地方遺跡では広範囲の土器群がまとまって出土している例として有名である。最近生駒西麓産の壺が、E地区と富山県氷見市で確認されているなど新たな発見もある。北陸系土器は、大阪府寝屋川市高宮八丁遺跡（緑色凝灰岩と鉄石英出土）、東大阪市瓜生堂遺跡、東京都文京区小石川遺跡などで出土例があるが、多くはない。

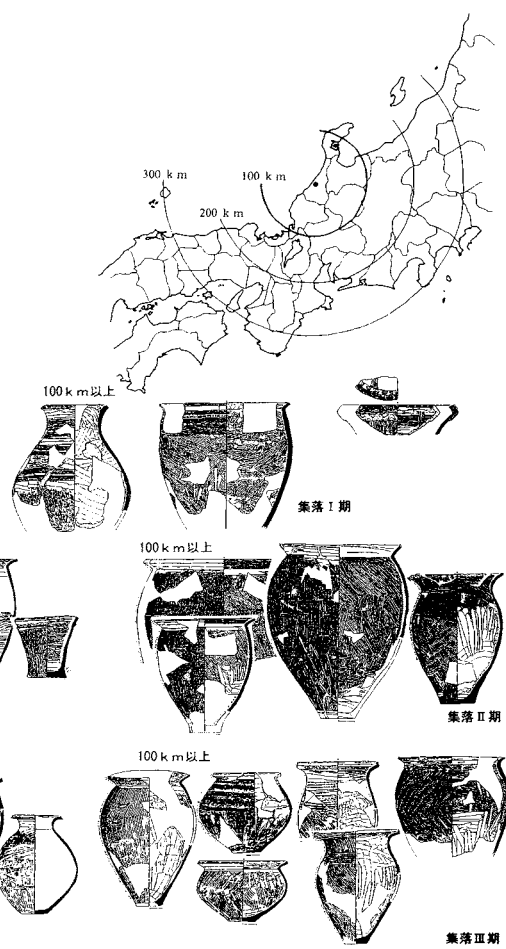
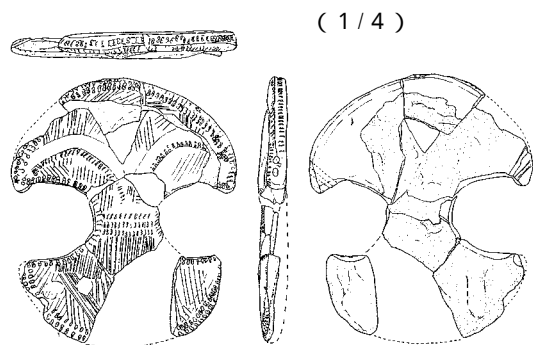
外来系の人々は、玉類との交換材を石川県にもたらしたものと思われ、石器・青銅器・鉄器などが確認される。長野県榎田遺跡周辺で生産された緑色岩類製石斧はA・B・D・E地区で14点出土しており、太平洋側のみならず日本海側にも広域流通していたようである。外来系の石材では、結晶片岩、ナヌカイト、下呂石、黒色粘板岩・頁岩などが確認される。また分銅形土製品は、A～E地区で8遺跡27個体以上出土している。青銅器はB・D・E地区において土製鑄型による生産遺物が確認され、鉄器の加工はB・F区で確認される。また鳥取県青谷上寺地遺跡出土木製高坏の類例が石川県では3例出土しており、搬入品の可能性を指摘した。しかし、地元品との意見も多くあり、検討課題として大きな問題が存在するが、しかしこの木製高坏は、山陰地方との交流を窺わせるものである。



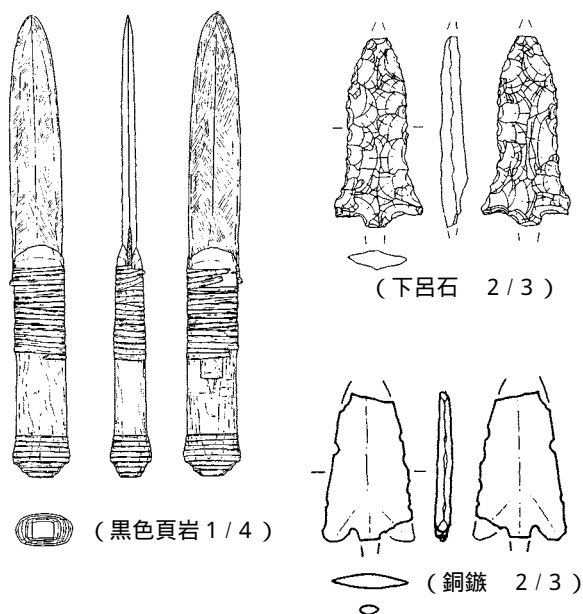
玉生産集中地区



碧玉製管玉の製作地と製品の分布 (S = 1 / 200万)

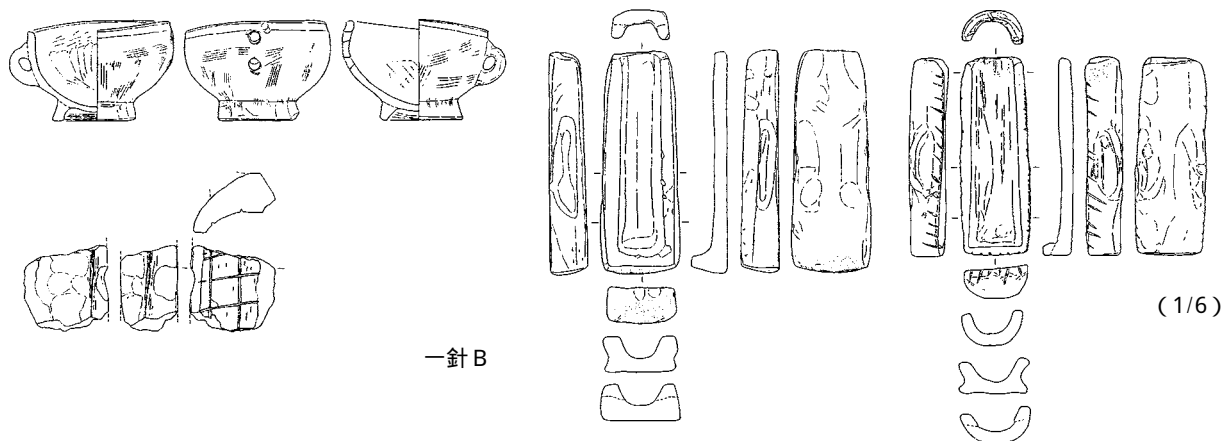


八日市地方遺跡の外來系土器

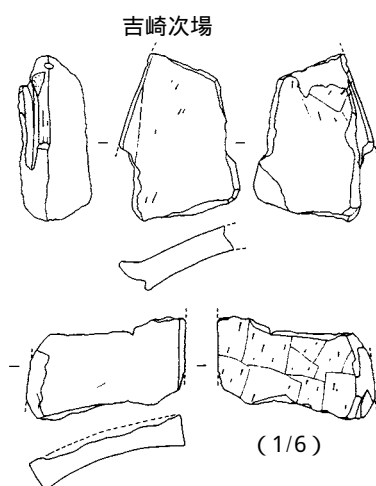


八日市地方遺跡の外來系遺物

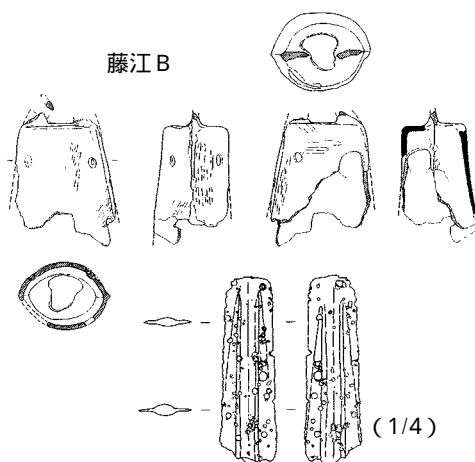
第1図 玉生産と交流



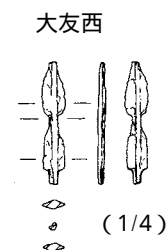
一針B



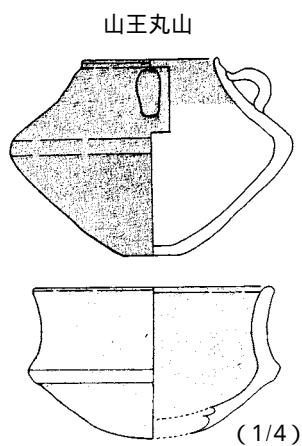
吉崎次場



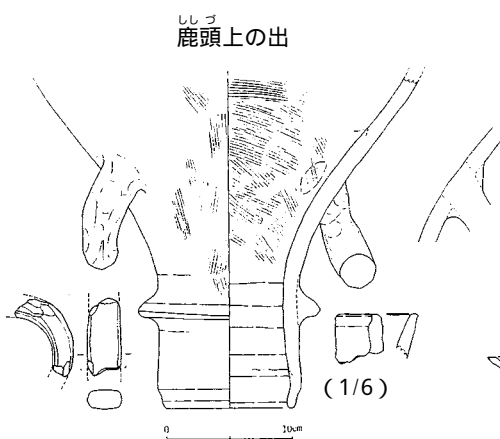
藤江B



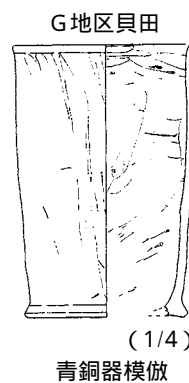
大友西



山王丸山

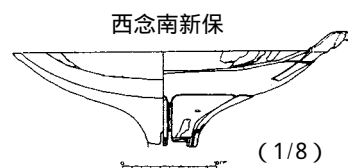


ししゴ
鹿頭上の出

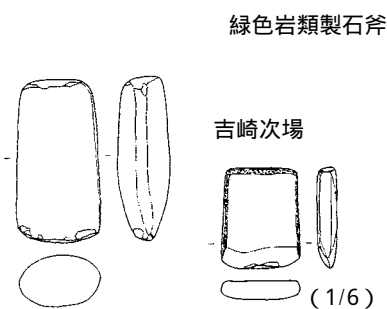


G地区貝田

青銅器模倣

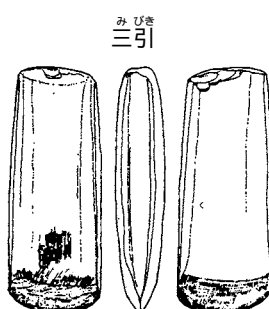


西念南新保

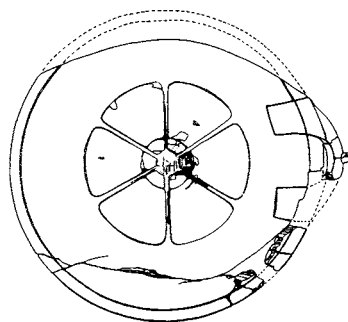


緑色岩類製石斧

吉崎次場



みびき
三引



第2図 石川県内の外来系遺物



富山県における弥生時代の玉生産と消費

中野由紀子（財）富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所）

富山県ではヒスイや緑色凝灰岩などの石材が豊富にあり、縄文時代から古墳時代中期頃まで玉生産が行われている。ここでは弥生時代中期から古墳時代初頭にかけて多くみられる緑色凝灰岩製管玉生産を中心とする玉作遺跡の生産と消費について述べていきたい。

1 玉作遺跡の概要

弥生時代中期 玉関係の遺物は9カ所の遺跡で見られるがほとんどが少量出土の遺跡である。中でも石塚遺跡では若干目立って玉作関係遺物が出土し、集中して玉作関係遺物がみつかった土坑とその周辺を工房址としている。この遺跡やその他の遺跡の例から、この時期は緑色凝灰岩製管玉を中心として生産を行い、若干ヒスイや鉄石英の玉生産が加わる。製作方法は形割の作出に施溝分割を行い、穿孔具と考えられるものでは石塚遺跡で磨製（安山岩）の錐、錐の未成品の可能性のある玉髓の剥片（第2図）、浦田遺跡で磨製（安山岩）打製（玉髓）の錐が出土している。

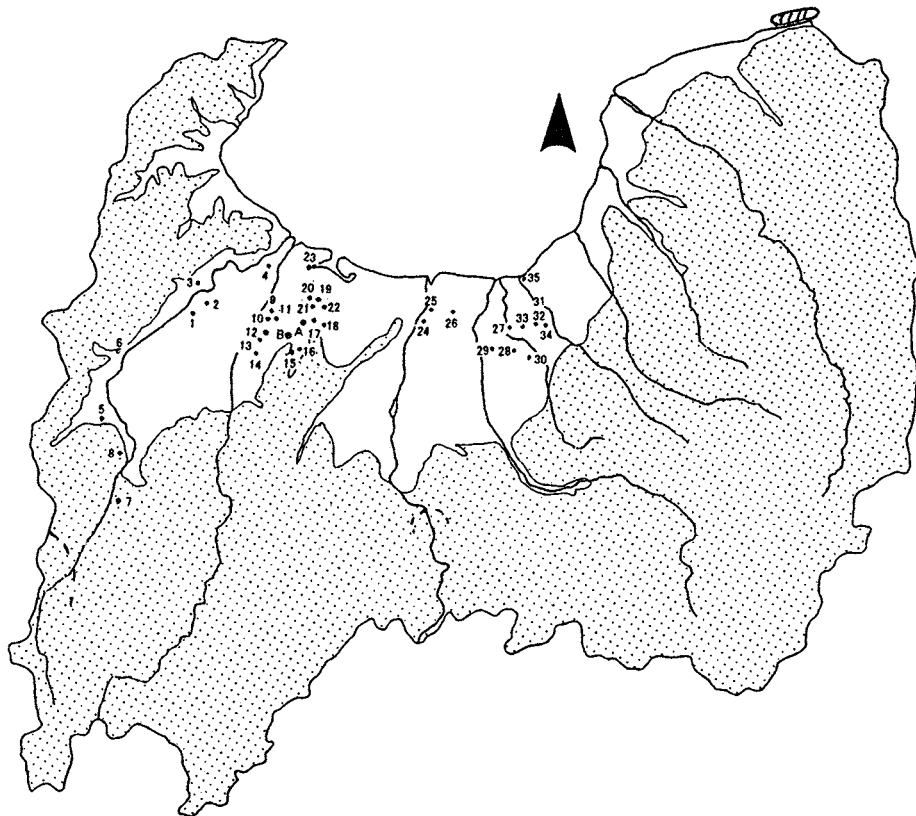
弥生時代後期～終末 この時期の遺跡は量の多少はあるが緑色凝灰岩が出土することが多く、これに伴って鉄石英やヒスイが出土する。下老子笹川遺跡（第3図）や江上A遺跡では建物内やこれに関連した周辺の溝から玉の未成品等が多く出土し、ここを中心に玉生産を行っていることがいえる。製作方法では施溝分割は行わず、打ち割り・側面調整で形割品を作出している。江上A遺跡では穿孔の際に玉を固定したと考えられる木製品が出土した。下老子笹川遺跡では鉄製の工具と思われるものが1点出土しており、新たな工具の導入に伴う技法の変化とみられる。

弥生時代終末～古墳時代初頭 緑色凝灰岩が少量出土し、それに伴ってヒスイが出土する。鉄石英はみられない。竹内東芦原遺跡では月影期と白江期の建物からヒスイや緑色凝灰岩の剥片等の玉作関係遺物が出土した。しかし、先に述べた下老子笹川遺跡でも玉作集落に自然流路や畠などを挟んだ地点に月影期の集落が立地するが、玉作関係遺物はみつからない。後期でみられたような、玉作関係遺物が大量に出土したり建物に伴って出土する遺跡は少なくなる。

2 玉の生産と消費について

弥生時代中期から始まった緑色凝灰岩を中心とする玉生産は製作方法に変化を持たせながら後期へ継続される。富山県における弥生時代の玉生産のピークは後期後半にあり、その後終末から古墳時代初頭にかけて縮小され、古墳時代前期の石製腕飾類を生産することなく終了する。

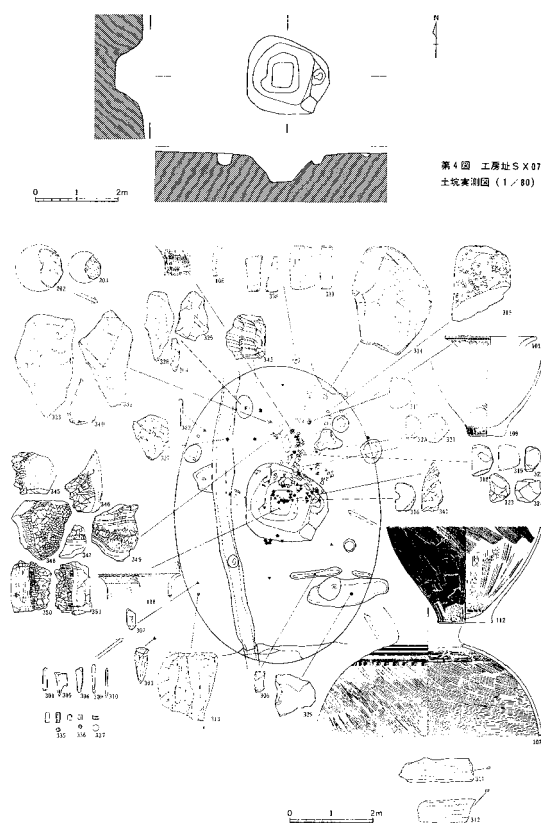
県内では石川県や福井県、丹後半島にみられる墓内に管玉を大量に副葬する例は今のところみつからない。消費地の一つである墓の調査例が少なく、消費についての詳細は不明である。後期後半の玉作遺跡では、下老子笹川遺跡で集落内から木製鋏先が出土し、畠と思われる遺構やプラントオパールが検出された。また江上A遺跡では、建物の周溝や周辺の遺跡から木製農具が出土している。このことから玉の生産は稲作を生業とする集落での農閑期の作業であると考え、緑色凝灰岩製の管玉については初めから広域流通を考えた生産ではなく、地域で消費するための生産であったと考えている。しかし姫川産といわれるヒスイを石材とした玉製品が日本全国へ広がっていること（第4図）を考えると、同じ遺跡内で生産している管玉もヒスイ製品と共に多少なりとも流通したことがいえるのではないかと考えている。



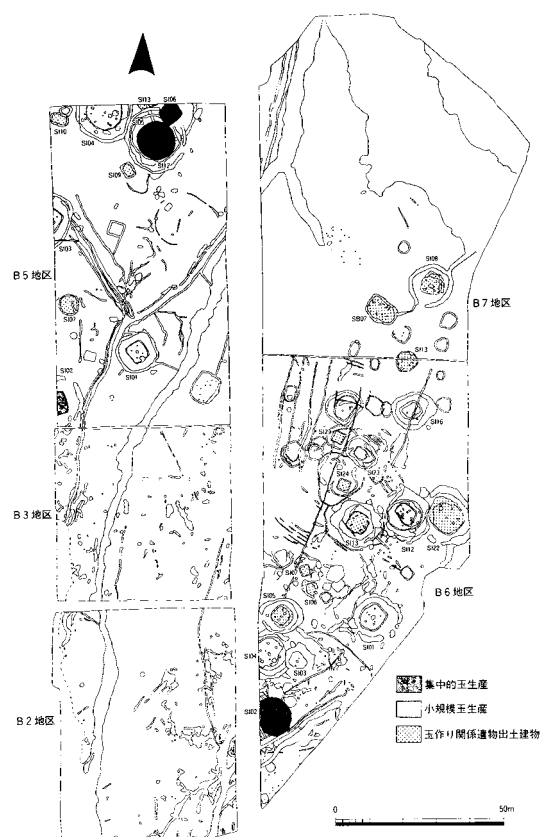
第1図 富山県内玉関係遺物出土遺跡

富山県内玉関係遺物出土遺跡一覧 弥生時代（一部古墳時代含む）

地図 番号	遺 跡	所 在 地	時 期	緑色凝灰岩・碧玉	鉄石英	ヒスイ	その他の石材	工具	備考
1	下老子笹川	東砺波郡福岡町	弥生後期後半	勾玉・管玉完成、未成 品・石核・剥片	管玉未成品・荒 割・剥片	勾玉完成、未成 品・石核・剥片	蛇紋岩・メノウ・ 石英・蛋白石	軽石・砥石・鉄製 工具	住居から出土、ガ ラス製小玉22点
2	石塚	高岡市	弥生中期	管玉・緑色凝灰岩	鉄石英	勾玉未成品・原 石		石鏃・石鏃・筋 砥石	工房址？
3	頭川	高岡市	弥生中期～			原石			
4	鷺北新	高岡市	弥生末～古墳初	管玉未成品					
5	榎田	小矢部市	弥生末～古墳初			勾玉完成、未成品			
6	下川原	小矢部市	古墳前期	管玉未成品・剥片					
7	梅原胡摩堂	西砺波郡福光町	弥生中期	管玉・剥片	剥片				
8	五百歩	西砺波郡福野町	弥生後期か古墳						管玉(石材不明)
9	二口油免	射水郡大門町	弥生後期～終末	管玉完成、未成品・剥 片		原石・未成品		軽石(砥石)・ 明石	
10	本江畑田	射水郡大門町	弥生後期	管玉未成品・石核					
11	本田宮田	射水郡大門町	弥生中期～古墳初	石核	石核				
12	布目沢北	射水郡大門町	弥生後期～終末	管玉完成、未成品・剥 片・原石	管玉未成品・荒 割・剥片	勾玉		明石	
13	布目沢	射水郡大門町	弥生後期～古墳初	石核					
14	串田新	射水郡大門町	古墳初頭	破片					
15	干田	射水郡小杉町	弥生後期	管玉未成品					
16	上野	射水郡小杉町	弥生終末～古墳初	管玉未成品		勾玉			
17	中山南	射水郡小杉町	弥生終末	管玉・原石・剥片				砥石	
18	三谷	射水郡小杉町	弥生後期～終末	管玉未成品・剥片		原石	滑石		
19	HS-04	射水郡小杉町	弥生終末～古墳前半	管玉完成・未成品		勾玉完成、未成 品・荒割			
20	愛宕	射水郡小杉町	弥生後期終末	碧玉岩				砥石	
21	戸破若宮	射水郡小杉町	弥生後期後半～終末	管玉未成品・剥片・石核	石核・剥片	剥片		砥石	
22	白石	射水郡小杉町	古墳初	管玉					
23	高島A	新湊市	弥生中期以降			ヒスイ			
24	豊田	富山市	弥生中期	良質の破片					
25	豊田大塚	富山市	弥生後期～古墳初	碧玉					
26	宮町	富山市	弥生後期	管玉完成、未成品	鉄石英	荒割など			
27	清水堂南	富山市	弥生後期～終末	管玉完成、未成品・剥片	石核・剥片	勾玉未成品・荒 割・剥片			ガラス製小玉3点
28	浦田	中新川郡舟橋村	弥生中期	管玉未成品	管玉未成品	荒割・原石		安山岩剥磨製石 鏃・玉髓製打製 石鏃	
29	竹内東芦原	中新川郡舟橋村	弥生終末～古墳前期	荒割・形割・剥片		荒割・形割・剥片	滑石		
30	辻	中新川郡立山町	弥生後期	管玉未成品		原石			
31	辻上A	中新川郡上市町	弥生後期後半	管玉完成、未成品	管玉未成品	勾玉完成、未成 品・小玉未成 品・石核	滑石・水晶・メ ノウ	明石・砥石・鳴 子形木器	住居から出土
32	江上B	中新川郡上市町	弥生後期後半～古墳初	管玉未成品		勾玉未成品			
33	放土ヶ瀬北	中新川郡上市町	弥生中期	管玉未成品・剥片		原石・石片	メノウ・石英		
34	砂林開北	中新川郡上市町	弥生後期後半～古墳初				蛇紋岩		
35	魚野	清川市	弥生中期～後期	管玉未成品	管玉未成品				
A	罌山(第1 号土坑墓)	射水郡小杉町	弥生後期	管玉					
A	罌山(第2 号土坑墓)	射水郡小杉町	弥生後期			勾玉			
A	罌山(第3 号土坑墓)	射水郡小杉町	弥生後期	管玉					
B	南太閤山1 (土坑墓)	射水郡小杉町	弥生末～古墳初	管玉		勾玉			



第2図 石塚遺跡玉作り工房 SX07



第3図 下老子笹川遺跡玉作り関係遺物出土建物分布状況図



第4図 ヒスイ出土遺跡の分布図



新潟県の弥生時代の玉作遺跡

田海 義正（新潟県教育庁文化行政課）

新潟県では57遺跡で弥生時代の玉作関係資料が出土あるいは採集されている。越後では32遺跡、佐渡は25遺跡が挙げられる。越後の玉作遺跡の多くは海岸近くに位置し、内陸部では信濃川沿いの長岡市で2遺跡、十日町市で1遺跡、阿賀野川に近い五泉市で1遺跡の計4遺跡がある。佐渡では大佐渡と小佐渡山地に挟まれた国中平野と周辺に玉作遺跡（19遺跡）が集中する。

越後の玉作 前期は糸魚川市大塚遺跡からヒスイや滑石の玉素材、未成品が出土しているが、その玉製作技法は縄文の伝統を受け継ぐものである。中期では柏崎市下谷地遺跡で管玉製作工程を復元できる資料が検出され、上越市吹上遺跡では竪穴状遺構や土坑、小型掘立柱建物からなる玉作工房群が検出され、緑色凝灰岩の管玉とヒスイ製勾玉製作資料が出土した。三島郡和島村大武遺跡では、側縁に施溝打割痕を持つ管玉工程品が出土した。土器は下谷地遺跡に先行する。後期の糸魚川市後生山遺跡では工房とみられる3基の竪穴住居跡が発見され、円形プランの1号住居跡では中央のピットから放射状に4本の溝が延びる。床面からヒスイ原石や緑色凝灰岩、鉄石英剥片が出土した。上越市内では裏山遺跡・下馬場遺跡で同様の玉作がある。

佐渡の玉作 新潟県指定史跡新穂玉作遺跡に代表される中期の佐渡の玉作遺跡は、北陸地方でも屈指の規模を誇る。新穂村教育委員会の確認調査では45万㎡以上に広がる。その特徴は緑色凝灰岩の管玉に加え、鉄石英（赤玉石）の管玉を多量に製作している点と新穂技法と呼ばれる製作技法にある。平成8・9年に発掘調査された平田遺跡では、新穂技法にみられる端部への施溝分割と角柱状剥片稜への押圧剥離が先述の両石材と管玉穿孔具（石針）に用いられていた。鉄石英の管玉製作では10cm大の転石や漂石等が素材となる。加工では角柱状剥片278点のうち端部に擦切溝を持つものは、152点（55%）あり、施溝分割の積極的な利用が窺える。管玉穿孔の石針材は普通輝石安山岩と呼ばれ、10cm以下の転石等が利用されている。角柱状剥片を得る製作工程で施溝分割技術が最もよく取り入れられ、実は石針の製作工程（円柱を作った段階までだが）でこそ典型的な新穂技法の製作モデルが示される。石針には円柱形と円錐形の2形態がある。使い分けは不明だが、円錐形は太い方が作用面で、使用されたものは先端部が僅かに窪む。施溝分割に用いられる擦切具（石鋸）は小佐渡に産する板状に剥離する流紋岩が選ばれる。砥石は仕上げに軟質な緑色凝灰岩で中砥には砂岩・安山岩が使われる。管玉への利用石材は全て佐渡に産する。観察をまとめると、施溝部位は各工程とも端部（頭部）に集中する。穿孔方向は片方向を基本とし、両側穿孔は少ない。両側穿孔の場合も中央部で連結するものはなく、一方の深さが足りない場合に補足的に行う。分割・穿孔共に金属器の使用は認められない。製品は緑色凝灰岩で長さ9～14.7mm、太さ2.1～3mm。鉄石英は12.7～14.8mm、太さ2.4～2.6mmと細い。佐渡製管玉の流通はほとんど未解明だが、外面形状の観察と穿孔方法の検証を通し、消費遺跡の情報を共有化できる可能性がある。佐渡では管玉類の生産は中期に開始されたとみられるが、発掘調査例が少なく、始まりを明らかにし得ない。また、玉生産開始から間もない中期後半には、遺跡数からみて最盛期を迎えたと思われる。後期の玉作遺跡も少数あるが、生産は明らかに衰退したものとみられる。

図1 越後と佐渡の主な弥生時代玉作遺跡

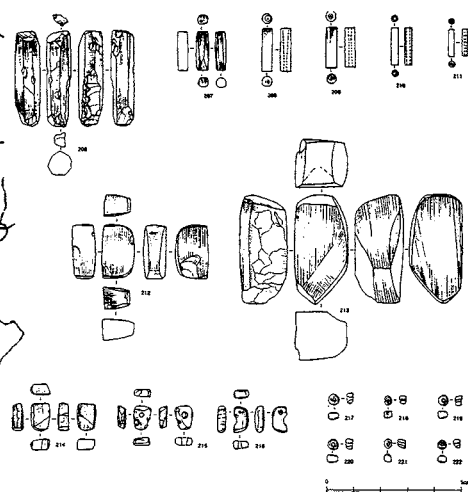
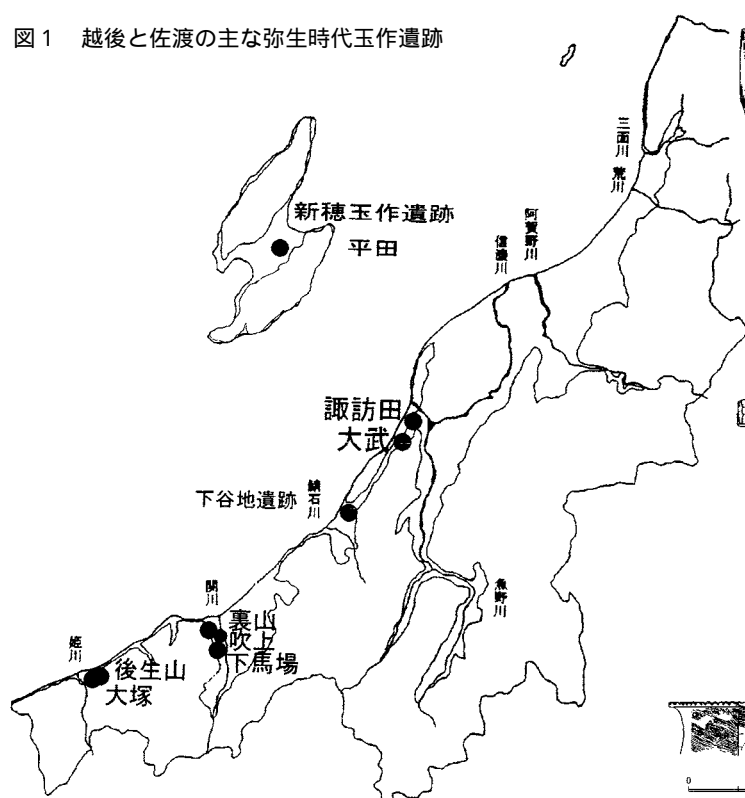


図2 裏山遺跡出土玉関係遺物

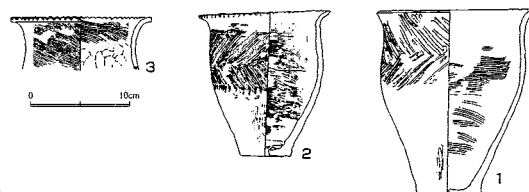


図3 吹山遺跡出土遺物

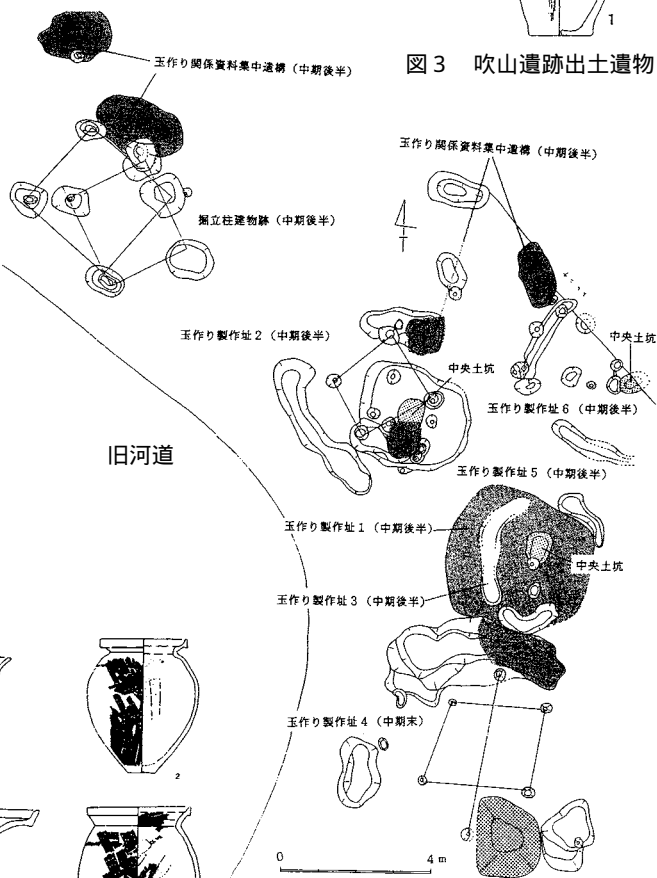


図4 吹山遺跡玉作り工房群と関連遺構

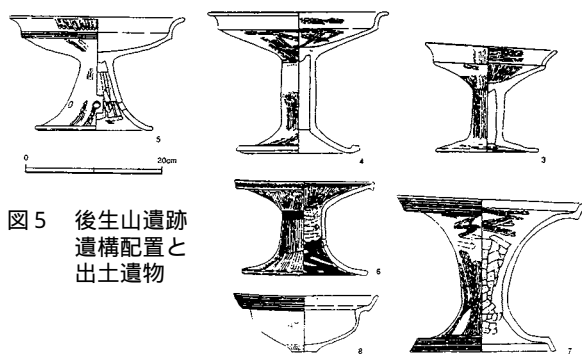
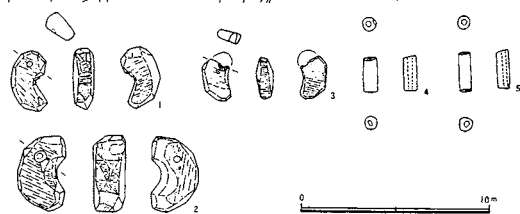
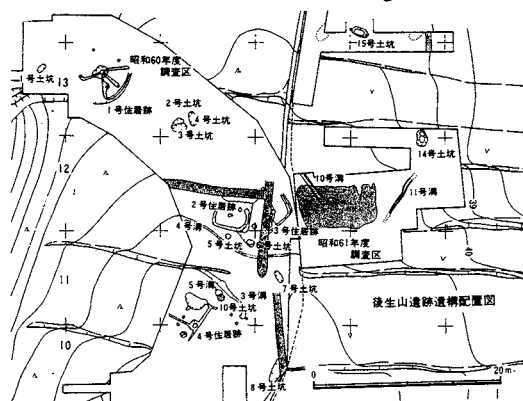


図5 後生山遺跡遺構配置と出土遺物

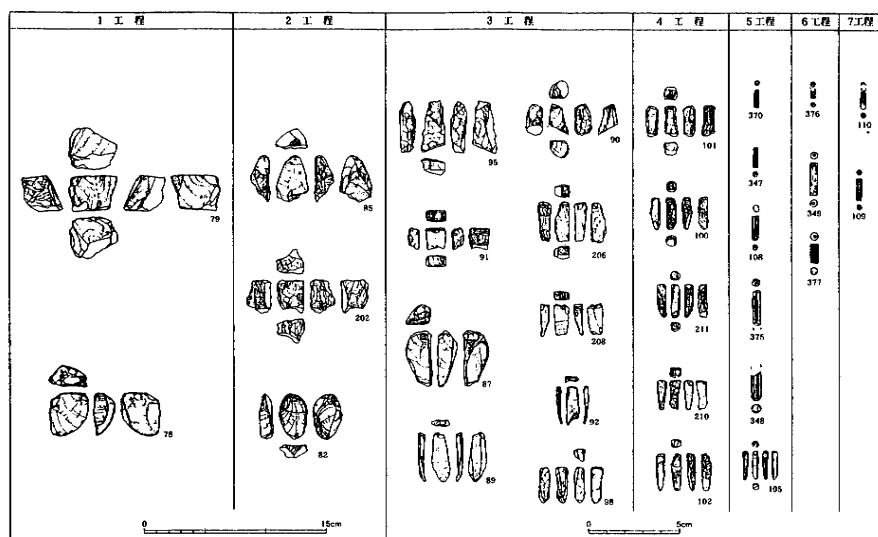


図6 平田遺跡 管玉製作工程（鉄石英）

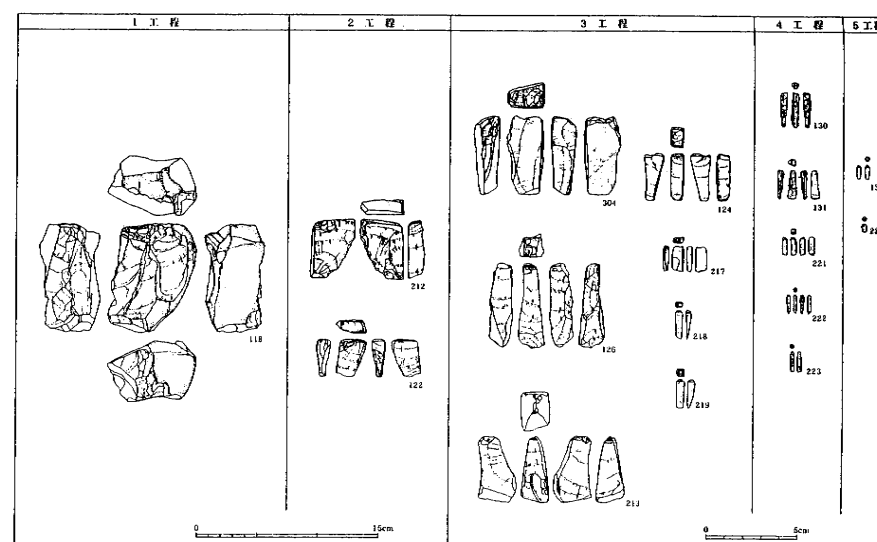


図7 平田遺跡石針製作工程

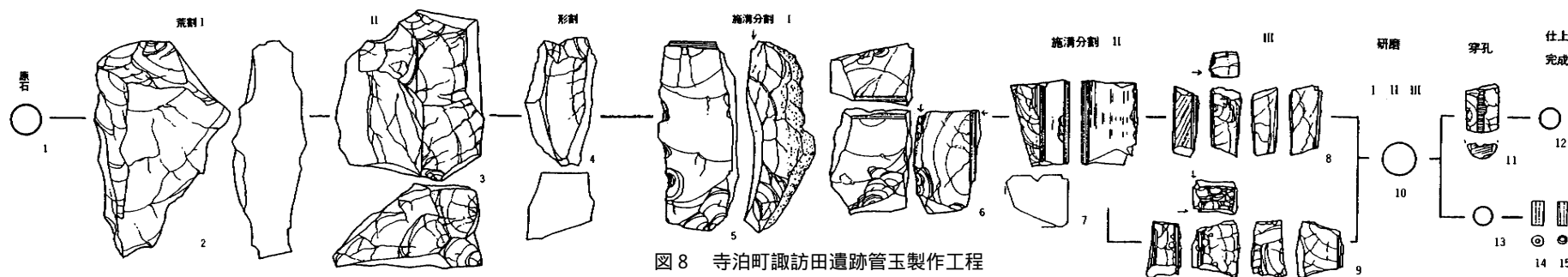


図8 寺泊町諏訪田遺跡管玉製作工程

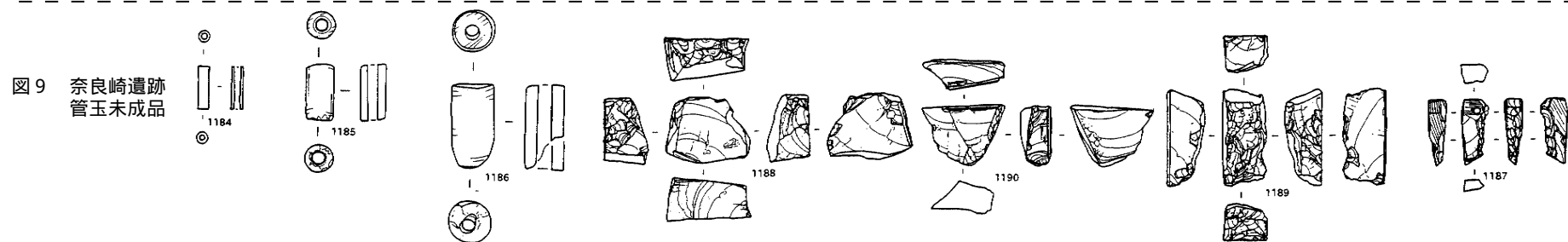


図9 奈良遺跡 管玉未成品



「副葬品の玉について」東北地方（青森県）

大野 亨（青森県八戸市教育委員会）

1．弥生時代の土坑墓

是川中居遺跡では、弥生時代前期（遠賀川系土器併行期）の甕棺から、碧玉製管玉が10点出土した。管玉は、径6.9～7.8ミリ、長さ13.4～21.6ミリ、孔径2.0～2.8ミリで、9点は分割されている。宇鉄遺跡では、弥生時代中期の土坑墓・甕棺が検出されている。中でも中期後半の第14号土坑墓からは、376点の碧玉製細形管玉と翡翠製丸玉1点が出土した。管玉は、径1.9～3.0ミリと細身であり、最長16.2ミリ、孔径0.6～1.6ミリである。また板子塚遺跡では、弥生時代中期の土坑墓から翡翠製勾玉・凝灰岩製玉・琥珀製玉が出土している。弥生時代の前期と中期では、副葬される碧玉製管玉の径が全く異なっており、その製作地及び搬入経路の違いが考えられる。

2．古墳時代の土坑墓

森ヶ沢遺跡では、古墳時代中期の土坑墓が20基ほど検出され、北大式土器・土師器・須恵器・玉類・鉄器・漆製品・黒曜石などが出土した。玉類は、ガラス製丸玉・琥珀玉・白玉・埋木玉である。白玉は、12基の土坑墓から合計2,900点ほど出土した。市子林遺跡でも同時期の土坑墓が4基検出されており、すべての墓から白玉が出土している。石材は、緑色凝灰岩・軟玉などであり、合計409点出土した。ほかにガラス製丸玉・琥珀製丸玉・管玉が検出されている。管玉は、最大長4.3ミリで、白玉と同じ石材を使用している。古墳時代中期の副葬品として、多量の石製白玉を用いる点が大きな特徴である。

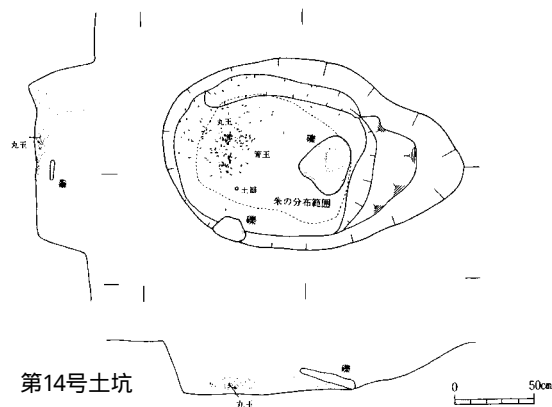
3．飛鳥・奈良時代の墓（末期古墳）

丹後平古墳群は、7世紀後葉から9世紀代にかけての円墳群である。調査では、85基の円墳と5基の土坑墓が検出されている。副葬品として玉類を検出したものは、15基の円墳と2基の土坑墓である。勾玉は瑪瑙製、切子玉は水晶製、管玉は碧玉製、丸玉はガラス製と土製が主体を占める。同古墳群で玉類を副葬するものは、7世紀後葉から8世紀前半に限定される。ほかの末期古墳のなかで豊富な玉類を副葬する古墳には、太田蝦夷森古墳（岩手県盛岡市）・藤沢狄森古墳（岩手県矢巾町）・熊堂古墳（岩手県花巻市）・猫谷地五条丸古墳（岩手県北上市）などがあげられる。末期古墳は、東北北部において6世紀後半以降に構築されると考えられている。その副葬品には、生産用具（鋤・鍬・刀子・鎌・紡錘車など）、日常用具（土器・装身具など）、武器（鉄刀・鉄鏃など）、武具（冑）、馬具（轡）がある。装身具には、玉類とともに釧や耳環がみられる。副葬品として玉類を用いる古墳は、6世紀後半から7世紀前半は少なく、7世紀後半から8世紀前半にかけて集中する。玉類の組み合わせは、勾玉と丸玉（小玉）を主体にし、それに切子玉と管玉を用いている。石材も玉に合わせて限定されており、玉を選別して副葬品として使用されたことが想定される。また丹後平古墳出土の勾玉の中に、丁字頭や翡翠製のC字形を呈するものが認められる。同一古墳に数点ずつ含まれており、古い形態の玉も首飾り等の組み合わせの中に意図的に含めていたことが考えられる。

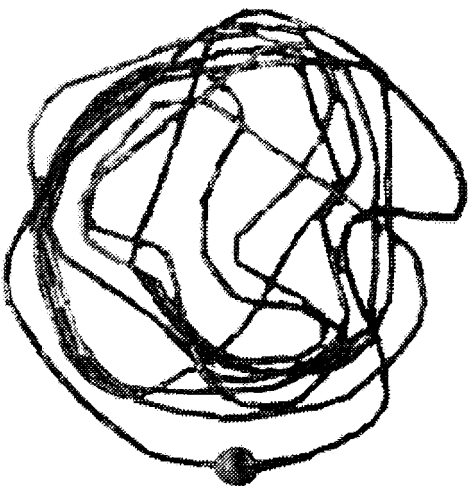


1. 宇鉄Ⅱ遺跡 (青森県東津軽郡三厩村)
2. 板子塚遺跡 (青森県下北郡川内町)
3. 是川中居遺跡 (青森県八戸市)
4. 森ヶ沢遺跡 (青森県上北郡天間林村)
5. 市子林遺跡 (青森県八戸市)
6. 丹後平古墳群 (青森県八戸市)

宇鉄Ⅱ遺跡



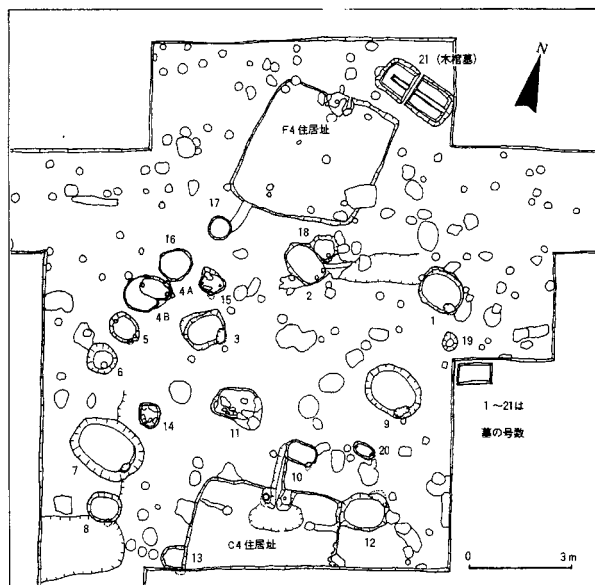
第14号土坑



青森県立郷土館『宇鉄Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
「青森県立郷土館調査報告書第6集」1972

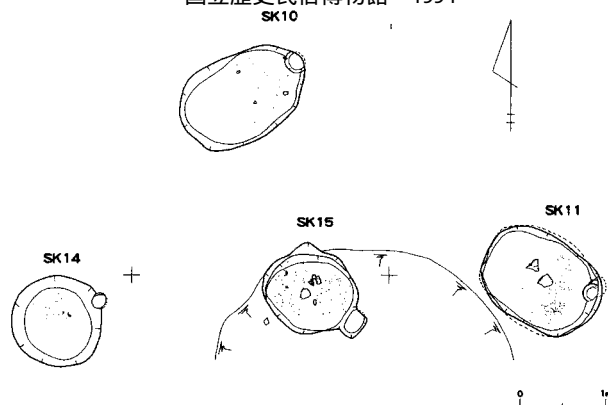


八戸市教育委員会『是川中居遺跡発掘調査の概要』
「八戸市遺跡調査報告会資料」2002



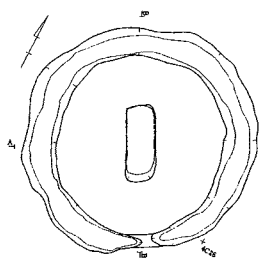
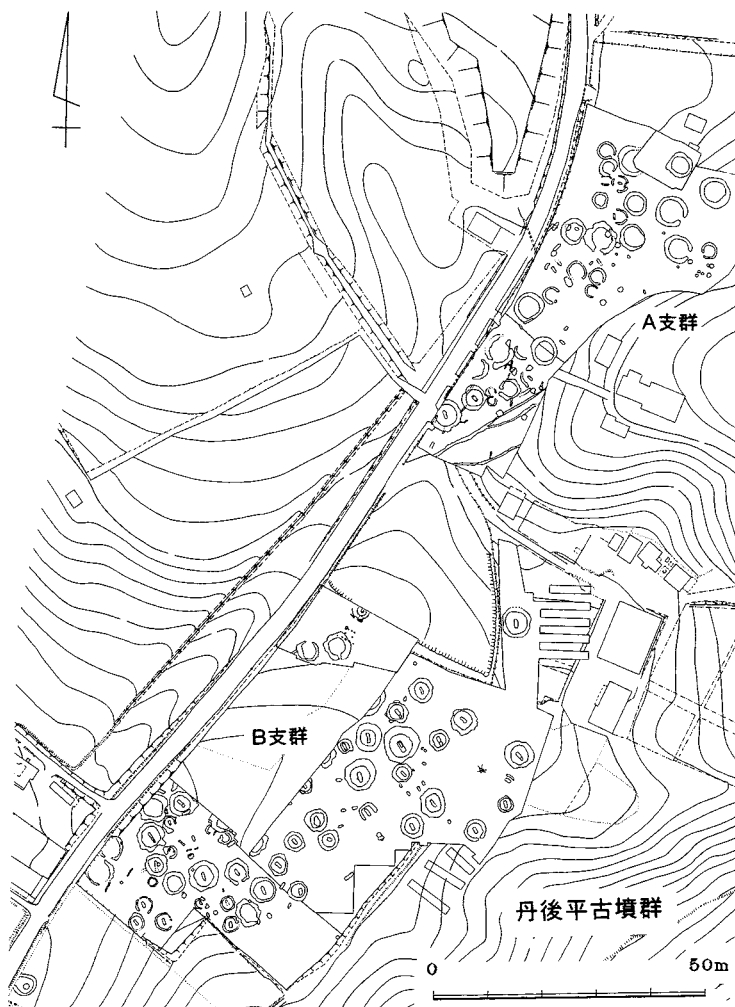
森ヶ沢遺跡 遺構配置図

阿部 義平『蝦夷の墓 - 森ヶ沢遺跡調査概要』
国立歴史民俗博物館 1994

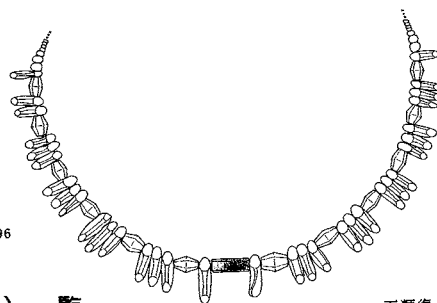
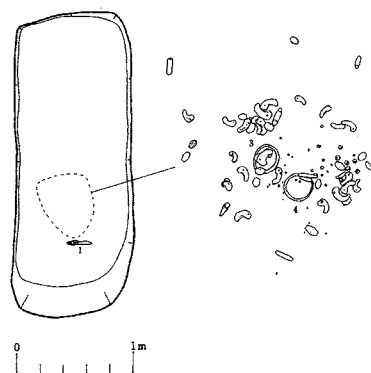


市子林遺跡 土坑墓

八戸市教育委員会『市子林遺跡発掘調査の概要』
「八戸市遺跡調査報告会資料」2002



B23号墳



八戸市教育委員会『丹後平古墳』「八戸市埋蔵文化財調査報告書第44集」1991

八戸市教育委員会『丹後平(1)遺跡、丹後平古墳』「八戸市埋蔵文化財調査報告書第66集」1996

八戸市教育委員会『丹後平古墳群』「八戸市埋蔵文化財調査報告書第93集」2002

丹後平古墳群副葬品（装身具）一覧

玉類復元図

古墳 番号	勾玉						切子 玉	管玉			棗 玉	丸玉					小玉	空 玉	金 環	青 銅 製 品	釧		環状 銅製品	鐙 子
	瑪瑙	翡翠	碧玉	水晶	不明	計	水晶	翡翠	碧玉	計	瑪瑙	ガラス	翡翠	琥珀	粘土	計	ガラス	青銅製			鉄製	錫製		
A24													27			27	9							
B2																		1						1
B3													21			21	164							
B6	2					2	1																	
B8																								1
B13													3	1		4	24							
B15	5	2				7	18								10	10	123		1					
B16	29	2	3	1		35	20		2	2		28	1			29	163	2		1	2			
B18												2				2	121						1	
B20							18		2	2		8			1	9	360				2			
B21	41	3	3			47	18	2	3	5	1	39			4	43	245	2		2	2			
B23	29	2	2			33	12		1	1		16		1		17	191				2	1		
B24	4					4						3			39	42								
B28	1					1																		
B30												1				1							1	
B32	3			1	1	5																		
B33																			1					1
B45																					2			
B51	20	1	1		1	23	6					14			10	24	288						1	
a1土坑															21	21								
b10土坑																						2		
b35土坑	9					9	3										12	4						
計	143	10	9	2	2	166	96	2	8	10	1	162	2	1	85	250	1700	8	1	2	3	12	5	2



北海道における琥珀玉の変遷について

西方 麻由（石狩市教育委員会）

本論の目的

北海道及び東北地方の琥珀出土遺跡を集成し、時期的傾向、さらにその原産地について推定する。また、特に北海道で見られる平玉出現期における両地域の関わりの有無についても見解を述べる。

日本の琥珀原産地（図1）

国内の琥珀原産地はほぼ北海道～九州まで分布している。時期的には白亜紀～第三紀に産出する。ただし大きな原産地は白亜紀のもので、太平洋沿岸に多く、中でも岩手県久慈地方は国内最大の原産地ある。また、南サハリンのスタロドゥフスコエ（旧栄浜）の海岸でも海琥珀（註）が採取できる。遺跡の分布と年代別傾向（図2・3）

東北地方では太平洋側に出土が片寄り、久慈地方に分布が集中する。時期的には古代（古墳、奈良・平安時代）が全体の約40%を占める。他の傾向としては、住居からの出土が多いこと、原石や未製品、破片が多く完形品は少ないこと、北海道で出土する平玉が同時期には見られないことがあげられる。

一方、北海道地方では旧石器時代～アイヌ文化期まで琥珀を利用し続けていた（図4～14）。特に、縄文文化晩期末～続縄文文化前半にかけて急激に出土量が増加する（図8・9・表1）。地理的には道東地域と太平洋沿岸地域に分布が集中し、殊に宇津内 a・大狩部期に平玉が出現する。それ以前に平玉は出土しておらず、この時期に同一規格の平玉を大量に生産する現象が起きる。この現象を可能にするのは製作技術だけでなく、平玉の大量生産を可能にする原産地を得たものと思われる。

東北・北海道地方の琥珀原産地について

遺跡分布などから、東北地方で出土する琥珀は久慈産のものと思われる。道内では海琥珀が採取できるが、原石の大きさからいって、これらから平玉を大量に製作するのは難しい。それ以外で平玉製作が可能な琥珀原産地としては、炭田の可能性が高い。久慈産琥珀が北上して来たという見解については、東北地方の琥珀出土例や、道南地域に出土例が無いことから考えても可能性は低い。したがって、分布状況から推測すると、道東地域の炭田が原産地として有力である（図15）。

終わりに

以上のことから、先史時代の琥珀の利用は東北・北海道地方で各々独自であり、原産地についても自地域内で持っていたものと考えられる。特に、平玉は北海道独自文化の象徴といえる。この文化は弥生文化と対峙し、それによって自身のアイデンティティを確認していたのではないかと考える。

平玉の大量生産を支えたのは、それらを作る高い技術をもつ職人と、原産地の発見があってはじめて可能になったと推測される。

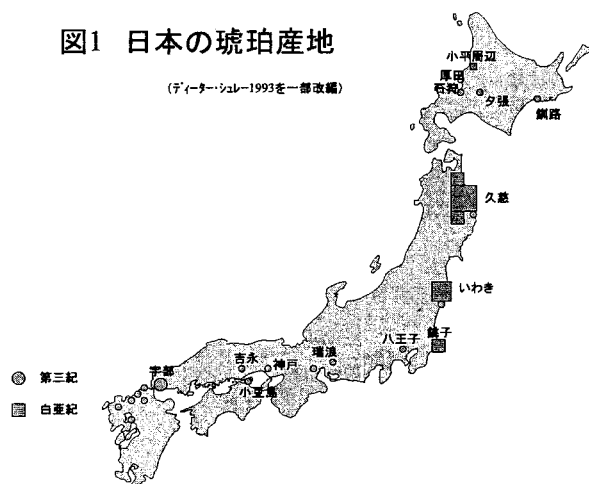
註

嵐などで母床から切り離され海岸に打ち上げられた琥珀のこと。厚田村聚富・望来などで採取可能。

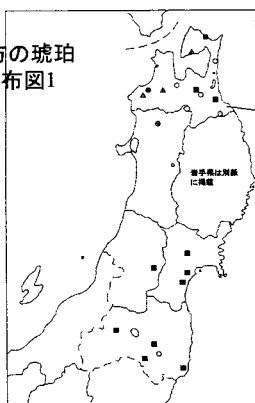
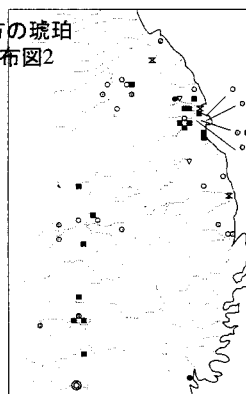
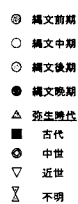
【参考文献】

乾芳宏1998「日高地方の琥珀玉について - 門別町トニカ遺跡の分析 - 」『時の絆 [道を辿る]』石附喜三男先生を偲ぶ本刊行委員会

(データ・シュレ-1993を一部改題)



 縄文前期
 縄文中期
 縄文後期
 縄文晩期
 弥生時代
 古代
 中世
 近世
 不明

岩手県内の琥珀出土
遺跡分布図

(宮古市教育委員会蔵田部一氏から
頂いた資料を基に作成)

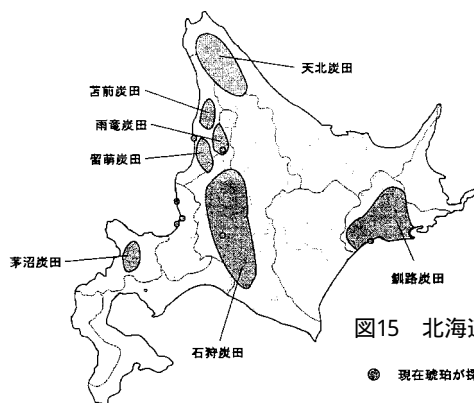


図15 北海道の主な炭田

● 現在琥珀が採取できるところ

矢野牧夫ほか 1978「石炭の語る日本の近代」より引用、編集

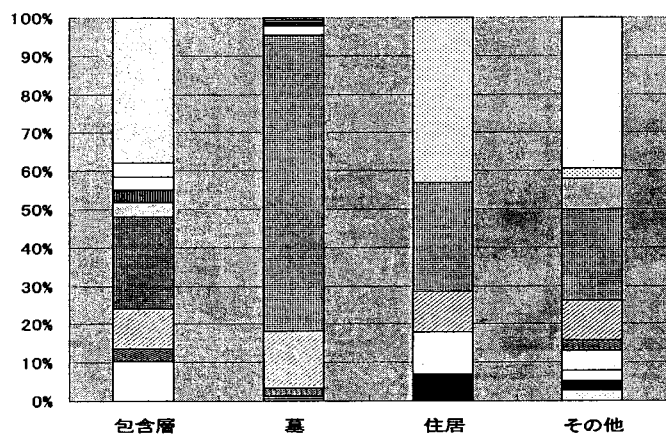
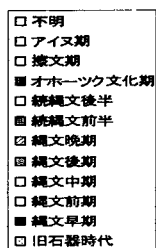


表1 遺構別琥珀出土時期（北海道）



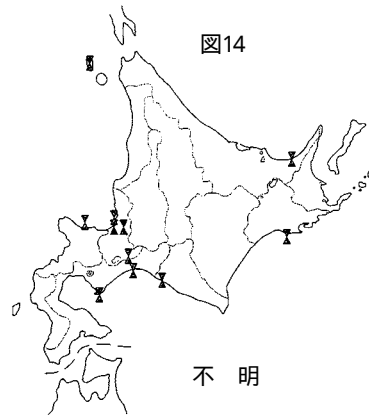
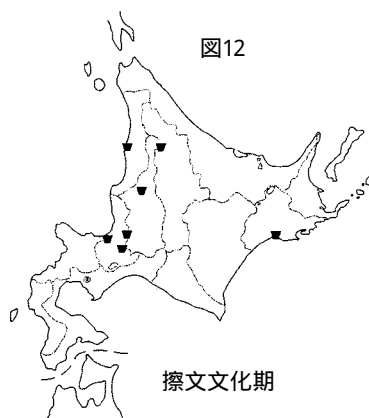
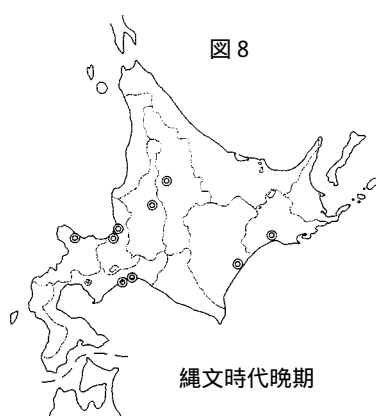
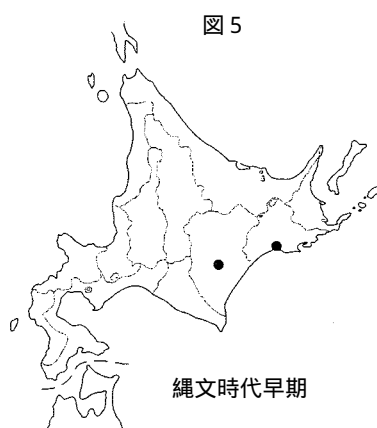
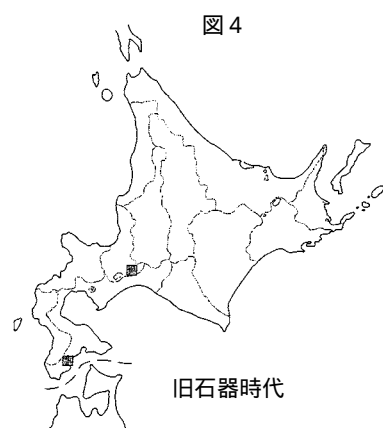


図4～14 コハク出土遺跡時期分布図



韓国における玉作り関連資料の一例

庄田 慎矢（東京大学大学院）

A．韓国無文土器時代～原三国時代の玉概観

韓国においては、新石器時代に貝製装飾品が見られるものの、石製の玉は無文土器時代以降に盛行する。李相吉の研究成果によれば（表）、無文土器時代の前半期には天河石製の曲玉や小玉と碧玉製の管玉が盛んに作られ、後期には管玉がガラス製に変わり、さらに原三国時代になると水晶製や瑪瑙製の玉が卓越するようになるという変遷をたどる（李相吉2002）。

B．晋州市大坪遺跡の玉作り遺構

現在韓国で玉作工房と考えられる遺構が見つかっているのは、慶尚南道晋州市大坪里遺跡と同山清郡黙谷里遺跡の2遺跡のみである（位置を図1に示す）。このうち後者は未報告のため詳細が不明である。

大坪里遺跡は慶尚南道晋州市大坪面大坪里に位置する大規模遺跡である。広大な畠遺構や豊富な植物遺存体の出土で注目を浴びているが、玉作り遺構が多数見つかった点でも注目に値する。中でも研磨剤とされる黄色砂が住居中央の土坑内から検出されている（図2-9）のは非常に珍しい例であり、住居内で玉作りが盛んに行われていたことを物語っている。他にも筋砥石（同図1・2）や天河石原石（同図3）、天河石製曲玉（同図4左）、天河石製小玉（同図4右・5）、水晶製穿孔具（同図6）、碧玉製管玉（同図7・8）などが検出されており、さらに住居址の隅から貝殻が多量に検出される例（同図10）もあってそれを加工して装飾品を作っていたようである。

これらの遺物は一箇所に集中して見られるのではなく、異なる遺構や住居のまとまりから相互補完的に現れるのが特徴で、集落間や単位集団間での分業などを考える材料となりそうである。

また、南江流域で製作された天河石製品が南海岸の中部地域に広く供給されたのではないかと推定する研究（崔鍾圭2000）もなされており、今後玉製品の流通の問題を考えていく材料ともなりうる。

韓国において、今回のテーマである「玉をめぐる交流」の研究はまだまだこれからの研究課題であるが、上記のような資料によって今後研究の進展が期待される分野である。

〔参考文献〕

- 李相吉(高田貢太訳)2002「装身具からみた細形銅剣文化期の特徴」『細形銅剣文化の諸問題』九州考古学会・嶺南考古学会第5回合同考古学大会要旨
- 崔鍾圭2000「頭湖里遺跡出土の天河石製球玉から」『固城頭湖里遺跡』慶南考古学研究所
- 慶尚大學校博物館1999『晋州大坪里玉房2地区先史遺跡』
- 慶尚大學校博物館2001『晋州大坪里玉房3地区先史遺跡』
- 国立晋州博物館2001『大坪里玉房1地区遺跡』
- 国立晋州博物館2002『青銅器時代の大坪・大坪人』
- 国立昌原文化財研究所・慶尚南道2001『晋州大坪里漁隱2地区先史遺跡 - 住居址、石棺墓編 - 』
- 国立昌原文化財研究所・慶尚南道2002『晋州南江漁隱2地区先史遺跡 - 集石・野外炉址・竪穴・其他編 - 』
- 文化財研究所1994『晋陽大坪里遺跡発掘調査報告書』
- 鮮文大學校博物館2001『晋州大坪里玉房5地区先史遺跡』



図1 遺跡の位置

年代	曲玉	管玉	球玉	備考
Ia	大河石 	管玉 	大河石 	松菊里段階以前 大坪里, 鮎野河
Ib				琵琶形銅剣期 支石墓, 石椁墓 松菊里, 大坪里
II				鍬形銅剣 琵琶形土帯土器 粗文鏡 草桶里, 枕亭河 南城里, 蓮花里 東西里
III	↓ ?	琉璃 	琉璃 	鏡器出現 三角口縁土帯 粗文鏡 横石石椁(木椁) 合松里, 素素里
IV	水晶 	琥珀 	水晶, 琥珀, 瑪瑙 	瓦質土器 木椁(木槨)墓 良刺里, 八達河 舎羅里

表 李相吉による玉の変遷表 (李相吉 2002 より転載)

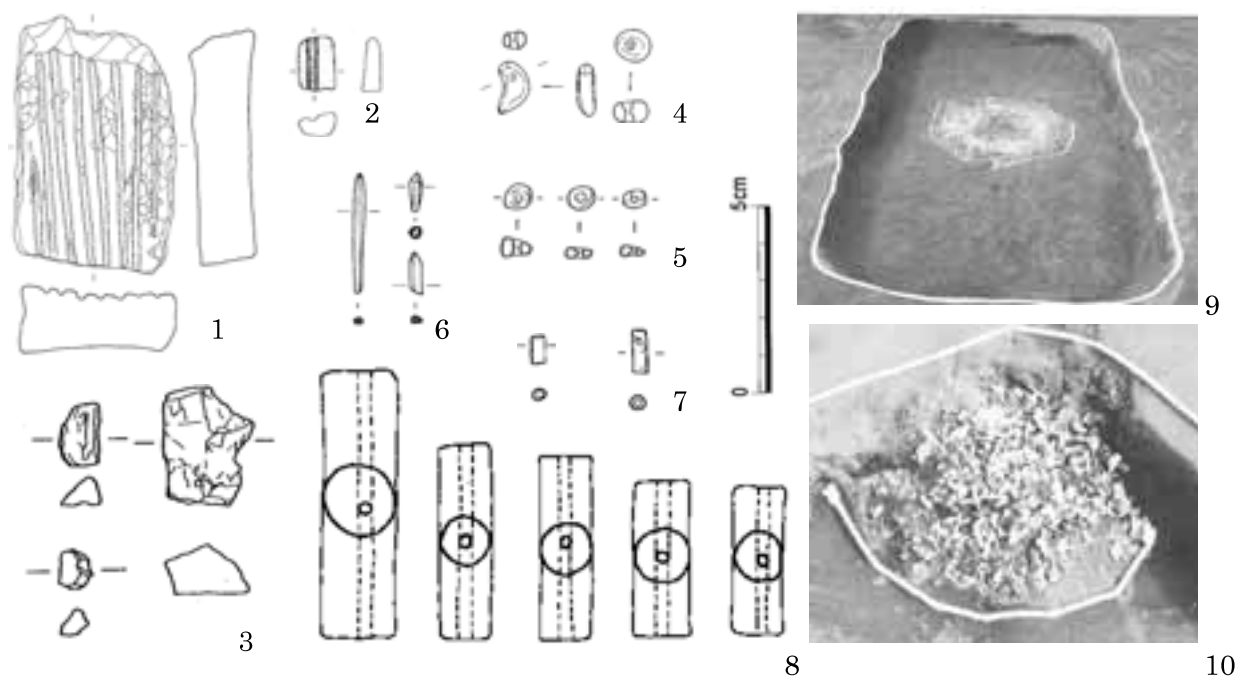


図2 玉作関連資料 1・2:S=1/8、3~8:S=1/2

(1: 玉房1地区出土筋砥石 2: 玉房5地区出土筋砥石 6: 漁隠2地区出土穿孔具 10: 玉房5地区住居址内貝殻集積検出状況
4: 玉房2地区出土天河石製玉類 5: 玉房8地区出土天河石製小玉 3: 玉房5地区出土天河石原石 7: 玉房1地区出土碧玉製管玉
8: 玉房2号支石墓出土碧玉製管玉 9: 漁隠2地区15号住居址(明るい部分が研磨剤) 各報告書の図・写真を転載)

討論と展望

伊藤 雅文（調査第4課）

北陸の玉作りは、弥生中期に始まり古墳時代前期に終わり、西日本の諸地域でもっとも活発に管玉を生産した地域の一つである。日常の発掘調査でも、弥生集落遺跡を調査した場合、緑色凝灰岩のチップなどの玉作り関係遺物が必ずといってよいほど出土するので、管玉は私たちにとって非常に身近に感じる考古資料のひとつである。反対に、古墳出土品としての玉類が少ないことから、ガラス玉、勾玉などへの親密さは相対的に少ない。このように、私たちの考古学的関心もおのずと弥生時代の管玉にある状況も無理からぬことであることを、ご承知おいていただきたい。

玉作りの技術的側面



討論の様子

玉を語るときにはその製作技術を抜きにすることは不可能であるものの、今回の研究集会ではあえてそれを避けることとした。それは非常に細かい製作技法の議論となって、玉の技術的検討で終わる可能性が高いと判断したからである。しかしながら、浜田耕作氏が『出雲玉作り遺跡の研究』（昭和2年）で玉関係遺物を分析しその復元的研究を行い、それをベースにして寺村光晴氏が『古代玉作の研究』（昭和41年）『古代玉作形成史の研究』（昭和55年）において玉作りの技法を整理するという手法によって研究を行ったことによ

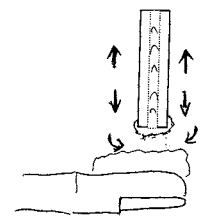
り、現在の主要な玉研究ではこの研究スタイルを踏襲しているといっても過言ではない。各地域で細かく分類された技法を系統だてることによって、その歴史的な意義を見出すことを目的としている。

したがって、製作技法を整理することによってその技術的な波及、そしてその社会的な背景を探ることができる可能性を持つものなので、玉の研究には必要欠くべからざる事柄である。最近では、玉本体の製作技術のみならず弥生中期に作られた石針（玉の穿孔道具）の製作技術を管玉製作技術の関わりの中でとらえる研究や弥生の鉄器化の中で製作道具の問題など、玉の製作技術がそれ本体のみならず製作技術の全体として把握するようになりつつある。

今回の研究集会では、田代氏が石針の製作についてふれたのと、田海氏が管玉の穿孔状況の観察に、歯科医師が使う歯形取り用の樹脂（歯科医療用印象材と石膏の混合）を用いた方法を披露された。それは、この樹脂を管玉の孔に注入し、それを取り出すことによって孔に残された工具痕跡の特徴の観察を容易にすることができるのである。この穿孔具による痕跡が石器なのか鉄器なのかの判別に有効であるし、各地域の管玉と相互比較してそれぞれの地域の持つ特徴を抽出できる可能性が期待できるとすれば、消費地から出土した管玉の特徴を各地域の生産地と比較することによって、生産地の特定が可能になるのである。

このように製作技術的な側面は、管玉や勾玉の単なる技法の検討ばかりでなく、それらの製作道具も含めた玉作り文化とも言うべき技術体系の把握がこれから求められよう。

また、管玉は韓半島の技術導入によって作られ始めたものであるが、現在彼の地における技法の様



管玉の孔への
樹脂注入方法

子や生産の実態について明らかになっているわけではない。庄田氏は大坪里遺跡の発掘調査成果の一端を報告し、筋砥石の存在など類似する要素も認められた意義は大きい。ただ、日本で管玉生産が始まった弥生前期後半と同時代比較資料の乏しさから直接的なわが国における玉作り研究材料として用いることができないのは残念である。

玉の流通と消費的側面

玉が使われるためには、生産地から何らかの方法によりその求める人々の手に渡り装身具として使われたものであり、本研究集会で対象とした弥生時代や古墳時代においては墓・古墳からの出土がそのほとんどを占める。このような玉石材を肉眼等で観察してもどこで作られたものか推定することは非常に難しく、しかも形が単純な玉にあっては形態からの製作地の特徴の把握も困難であるので、その産地同定の研究がほとんどなされていない状況である。このような中において京都大学原子炉研究所の藁科哲夫氏が行っている蛍光×線分析による産地同定方法が唯一の方法である。

当初は糸魚川産ヒスイと弥生・古墳出土ヒスイの同定から始まった研究である。ヒスイの場合、産地がかなり限定できることからそれなりに有効であった。しかしながら碧玉や緑色凝灰岩は日本各地で産出し、それぞれの特徴を十分把握できないまま産地を推定していく方法は、産地同定を実証的に考えるときの妨げになる可能性が高い。仮にそれぞれの産地の特徴がある程度把握できたとしても、碧玉や緑色凝灰岩には風化の度合いが強いものと弱いものさらにその中間のものなど多様な顔をのぞかせており、それぞれが同じ分析結果を示すものかどうか。また、玉作り遺跡出土玉石材の採取地が明らかになることは少なく、藁科氏が川原転石で産地の原試料としたことの妥当性がまだ実証されていない以上、その産地同定結果をそのまま受け入れることに抵抗も多い。したがって、玉の消費地からみた玉の特徴の分析もなされているにもかかわらず十分な成果が得られていないのは、上記のような理由によるものだろう。

浅野氏や久田氏は、玉作りの地域からそれほど離れていないところに石材採取地を想定している。これは、金沢周辺の玉石材は凝灰岩質だが南加賀の玉石材はガラス質に近い、などの肉眼観察による経験上判断されたことである。個人的には、玉作りが専門化する以前の段階で石材供給範囲が広域であるとは思えない。深田氏によって出雲の玉作り遺跡の分布が古墳中期以降花仙山周辺に集約されていく状況を報告しており、これも石材供給との関わりの中で理解できるものと考えられる。

さらに浅野氏は地元で消費するために生産されたものであり、交換を目的として作られたものではないとした。これは九州からの鉄製品の波及と玉製品が見返りという構図に異論を挟むものだが、福岡県飯塚市立岩遺跡28号甕棺出土管玉がヘアーバンドとして組まれていることや、弥生の細身管玉が古墳からも出土するような玉の伝世が想定されることを考えると、玉作り地帯の自己消費を主目的にして玉がつくられたとするのは、いささか強引すぎまいか。

弥生時代の玉作りは山陰や丹後・北陸に加え、近江などの畿内や信州など日本各地で行われていた。これらの地域で作られた玉がみな同じような流通で動いているとは思えない。つまり、日本各地で出土する玉がどのような来歴を持っているかこれからの大きな課題であろう。弥生時代に限ってみると、その主要な出土は墳墓遺跡に限られながら、必ずしも生産地周辺に玉が多くそして周縁部にいくにしたがって少なくなるわけではない。このような玉の出土状態であれば、生産地を中心とする自然的な流通を想定することができるが、この想定ができない以上何らかの流通システムが存在したはずである。一般的に弥生中期には各種物資の流通に各地域の拠点となる集落が深く関わっているといわれており、玉も同じように理解できるものであろうか、これからの課題となろう。

大賀克彦氏は弥生の管玉の流通について単純化したモデルを提示しているが、産地同定が正確に行

えない現状にあっては、この研究と平行して消費地における徹底した分析と観察、さらに生産地域における消費状況の分析などの諸作業が必要である。

さらに、生産地で玉を作った後それを首飾り等として完成させるという二つの工程がありそれらの主体の問題がある。そこまでの議論は研究集会で及ぶことはできなかったが、弥生時代では管玉単一の構成を基本とする一方で、古墳時代では管玉とともに丸玉や聚玉、勾玉等の各種石材から作られた玉を組み合わせて完成させるように変化する。このような使われ方の違いは装身具のバリエーションを広げその社会的な位置が多様になったものと推測できる。古墳時代の政治体が弥生時代の地域的なまとまりを越えたものである以上、流通状況に大きな違いがあつて当然である。このような点で、大野氏の報告にある丹後平古墳群のような東北の後期古墳に大量の玉が副葬される意味は大きい。

さまざまな玉

主に緑色凝灰岩や碧玉を対象としていたものの、九州では弥生後期以降ガラス製品の生産によって玉のガラス化が顕著になり、丹後でも弥生終末以降ガラス製品が卓越する。九州では韓半島や北陸産とされる管玉の舶来していたものを新たな素材で作り出したものであり、その契機がいかがなものであつたであろうか。

一方、北海道ではコハク玉の生産が特徴的であり、縄文時代以降地元材料による生産として認識できよう。こと本州島との関わりの中で、石狩低地帯における弥生時代に並行する続縄文時代のコハク玉が太い管玉とのみ共伴し、細い管玉とは共伴しないことが興味深い。弥生中期には青森県宇鉄遺跡から大量に管玉が出土していることから東北北部まで大量の管玉が流入しているはずであり、北海道の玉もその脈絡で理解できよう。その中で大野氏の紹介による是川遺跡出土管玉が弥生前期後半に属する資料の可能性が高く、韓半島製品もあり管玉自身どう理解するかのみならず、その流通や入手の歴史的評価をめぐってこれから注目を浴びるものである。

なお、現在でこそ出雲で勾玉を生産し、糸魚川周辺でもヒスイ製勾玉の生産を行っているものの、これらは近年生産を始めたものであり、古代からの伝統のもとに続いているわけではない。弥生時代に使い始めた玉による装身方法が古墳時代にその幅を広げ多彩なものに展開した。それらが中央の政治体制の下一元的に管理されていたものかどうか、それを使わなくなったことの原因等々玉の持つ社会的な側面を明らかにする研究が少ない現状である。ある一面で、古墳時代の特質を明らかにしうる可能性を持っていると考えるだけに、残念である。



資料見学会の様子

資料見学会

研究集会翌22日に当財団研修室で行った。石川県の資料としては、縄文時代の玉製品に田鶴浜町大津くろだの森遺跡、弥生時代の玉やその製作工程を示す資料とその工具に松任市野本遺跡など、関連資料として古墳時代腕輪形石製品の未製品等の松任市浜竹松遺跡の出土品を展示した。また、西方氏が北海道琥珀原石を、大野氏が丹後平古墳群玉資料と弥生時代前期に遡る是川遺跡の甕棺出土管玉を、中野氏が下老子遺跡の玉および未製品と工具、浅野氏が林・藤島遺跡出土品を持ち寄り、見学・検討を行った。